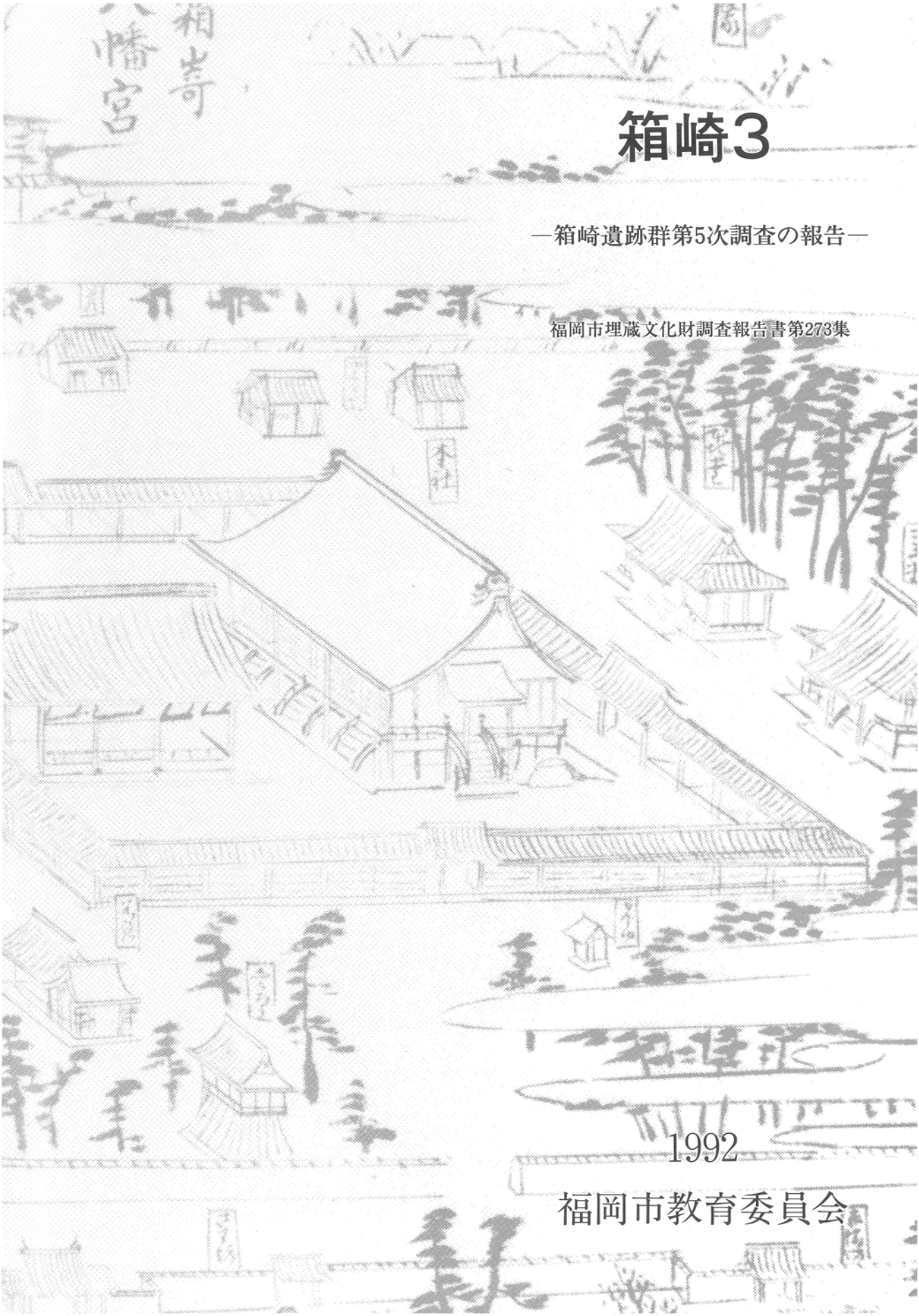


箱崎3

—箱崎遺跡群第5次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集

1992

福岡市教育委員会

序

本市の東北部に位置する箱崎遺跡群は筥崎宮を中心として営まれてきた古代から中世・近世の遺跡で、特に中世における対外交渉の拠点として、博多遺跡群と共に重要な役割を担ってきました。

本書は平成３年度に、民間の共同住宅建設に先立って実施された箱崎遺跡群第５次調査の調査成果をまとめたものです。

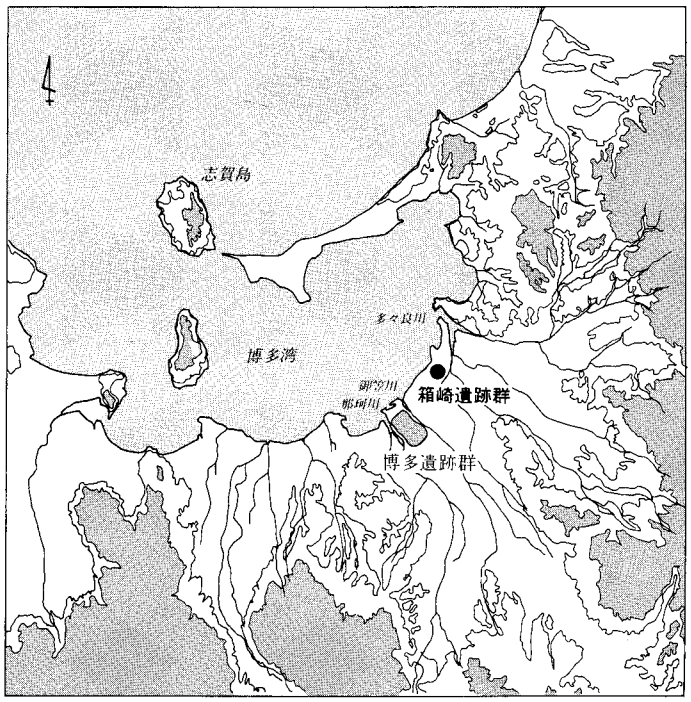
文化財に対するご理解を深めていく上で、また学術研究の分野において、本書を活用していただければ幸いです。

なお発掘調査から資料整理にいたるまで地元関係者をはじめとして、多くの方々のご協力に対して心から謝意を表するものです。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉



遺跡略号　HKZ-５
調査番号　9125
所在地　福岡市東区箱崎1丁目25・27

例言

1. 本書は平成３年度に実施した東区箱崎１丁目地内の民間開発に伴う箱崎遺跡群第５次調査の調査報告である。
2. 本書は田中壽夫が編集、執筆した。編集にあたっては、宮園登美枝・山中けい子の補助を受けた。
3. 本書で使用した方位はすべて磁北である。
4. 遺構番号は検出した順に通し番号をつけ遺構略号を番号の頭に付した。
5. 本調査に関する記録類、出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理される。

箱崎遺跡群第５次調査

本　文　目　次

頁

Ⅰ．はじめに …… 1

1．　調査に至る経過 …… 1

2．　調査の組織 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2

1．　遺跡の立地 …… 2

2．　箱崎遺跡群の既往の調査 …… 2

Ⅲ．発掘調査の記録 …… 4

概　要 …… 4

1．　柵列（SA） …… 5

2．　掘立柱建物（SB） …… 5

3．　溝（SD） …… 6

4．　井戸（SE） …… 7

5．　土壙・木棺墓（SK） ……14

6．　竪穴遺構（SX） ……16

7．　その他の遺構と遺物 ……22

Ⅳ．おわりに ……23

挿　図　目　次

頁
Fig, 1　箱崎遺跡群と周辺の遺跡（1/35000）……3
Fig, 2　第５次調査地点位置図（1/1500）……3
Fig, 3　調査区配置図（1/300）……4
Fig, 4　第５次調査遺構分布全体図（1/60）（折り込み）
Fig, 5　柵列・掘立柱建物平面および断面図（1/100）……5
Fig, 6　柱穴出土遺物実測図（1/4）……5
Fig, 7　井戸平面および断面図１（SE005・049、1/50）……6
Fig, 8　井戸平面および断面図２（SE052・241・354、1/50）……9
Fig, 9　井戸平面および断面図３（SE084・240・310、1/50）……10
Fig,10　井戸平面および断面図４（SE326、1/50）……11
Fig,11　井戸平面および断面図５（SE388・403、1/50）……11
Fig,12　井戸出土遺物実測図１（1/4）……12
Fig,13　井戸出土遺物実測図２（1/4）……12
Fig,14　井戸出土遺物実測図３（1/4）……13
Fig,15　土壙・木棺墓平面および断面図（SK067・266・347・390、1/40）……14
Fig,16　土壙・木棺墓出土遺物実測図（1/4）……15
Fig,17　竪穴遺構平面および断面図１（SX025・028・029・035・045、１/40）……16
Fig,18　竪穴遺構出土遺物実測図１（1/4）……17
Fig,19　竪穴遺構平面および断面図２
（SX043・056・058・075・109・113・146・165・177・187・229・337、1/40）……18
Fig,20　竪穴遺構出土遺物実測図２（1/4）……19
Fig,21　竪穴遺構出土遺物実測図３（1/4）……19
Fig,22　竪穴遺構平面および断面図３（SX318・335・381・395、1/40）……20
Fig,23　竪穴遺構出土遺物実測図４（1/4）……21
Fig,24　その他の遺物（1/4）……22

図　版　目　次

PL, 1　(1)箱崎遺跡群第５次調査地点遠景（南から）
(2)第５次調査地点完掘状況（東から）
PL, 2　(1)柱穴・掘立柱建物検出状況（東から）
(2)調査区中央東側井戸分布状況（北東から）
PL, 3　遺構個別写真（SE005・049・052・084・236）
PL, 4　遺構個別写真（SE240・241・310・354・388、SX008）
PL, 5　遺構個別写真（SK017・025・045・058）
PL, 6　遺構個別写真（SK067、SX229・266・347・389・390）
PL, 7　出土遺物写真（１）
PL, 8　出土遺物写真（２）

表　目　次

Tab, 1　出土土師器遺構別計測表（平均値）……24

Ⅰ　はじめに

1.　調査に至る経過

1991年(平成３年)６月19日付けで、株式会社ダイナから埋蔵文化財課に対して、東区箱崎１丁目27・25地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願いが提出された。

申請地は箱崎遺跡群の範囲内に含まれる地点であること、筥崎宮の北約130mに位置していること、さらに第３次調査地点に近接していることなどから、事前に遺跡の有無の確認が必要と判断された。埋蔵文化財課では、同年７月３日に試掘調査を実施し、申請地には鎌倉～室町期の遺構・遺物が敷地全体に比較的良好に残っていることを確認した。試掘調査の成果を踏まえ、関係者と協議を重ねた結果、工事により破壊される建物の建設予定範囲について、株式会社ダイナからの受託調査として本市教育委員会が本調査を実施することとなった。調査および資料整理にあたっては下記の組織の下で行なった。

2.　調査の組織

調査委託　株式会社　ダイナ
　　代表取締役　藤原康弘
調査主体　福岡市教育委員会
　　教育長　井口雄哉
調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　学　埋蔵文化財第２係長　塩屋勝利
事務担当　埋蔵文化財第１係長　飛高憲雄
　　吉田麻由美
調査担当　試掘調査　横山邦継　宮井善朗
　　本 調 査　田中壽夫
調査作業　森垣隆視　瀬戸啓治　西畑盛行　篠崎伝三郎　岩隈史郎　熊本義徳　高浪信夫
　　近藤誠一　井上紀世子　松井邦子　平井和子　有富溢子　緒方マサヨ
　　庄野崎ヒデ子　西尾タツヨ　柳瀬　伸　津川真千代　近藤澄江　村田敬子
　　吉住シズエ
整理作業　宮園登美枝　山中けい子

II　遺跡の立地と環境

1.　遺跡の立地（Fig, 1・2、PL, 1）

箱崎遺跡群は、博多湾岸に形成された千代松原から箱崎まで南北に伸びる古砂丘上に立地する。筥崎宮はこの砂丘のほぼ中央位置を占めている。今回の調査地点は筥崎宮から北へ約130m離れた地点に位置している。既往の調査成果によると、標高3.5～4.5mを測る砂丘の尾根に沿って、古代から中・近世の遺跡が東西に約400m、南北に約1000mの範囲で分布していることがわかってきている。遺跡北部の調査が進んでいないためにその北限は未確定であるが今後の調査によって徐々に明らかになることと思われる。

2.　箱崎遺跡群の既往の調査

箱崎遺跡群は今回の調査を含めて５回の調査が実施されている。ここでは第４次調査までの成果を概観する（参考文献は裏表紙に記載）。

第１次調査（1983年7月～12月、馬出２・５丁目地内、市教育委員会調査）

地下鉄工事に先立って、路線内の調査を実施。筥崎宮の南側に位置したこの調査地点では、平安時代末から室町期までの集落が形成されており、現在の「大学通り」の両側に集落が存在していたことが確認できた。遺構は、井戸や廃棄用土壙、木棺墓、掘立柱建物などである。また土師器や陶器のほか、輸入陶磁器が数多く出土。

第２次調査（1986年11月～1987年1月、箱崎１丁目地内、福岡県教育委員会調査）

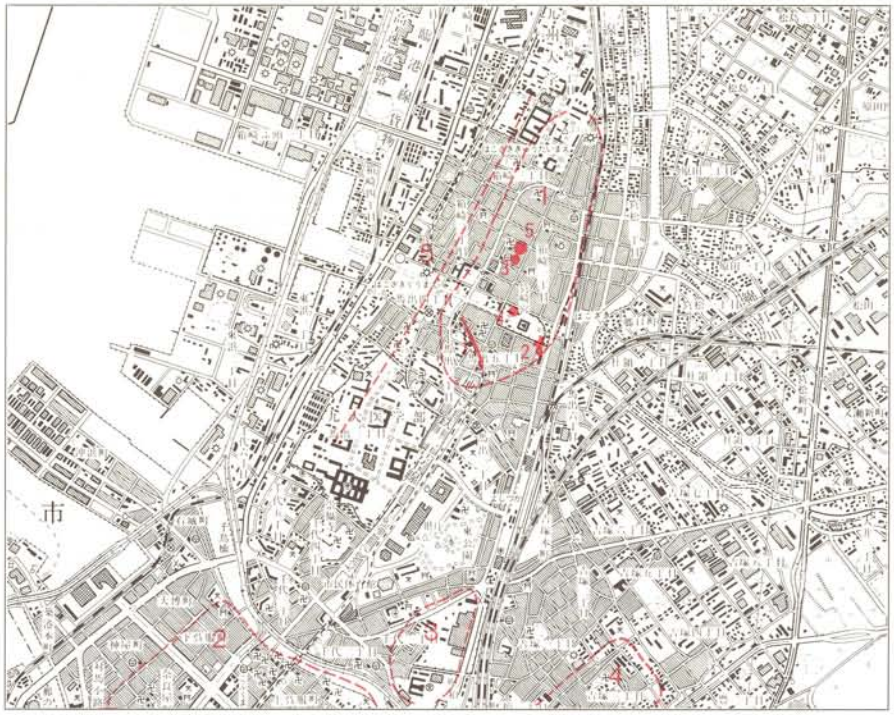
粕屋郡総合庁舎建設に先立って行なわれた。調査地点は筥崎宮の南隣にあたっており、筥崎宮と関連する遺構・遺物の発見が期待さた。発見された遺構のうち注目されるものとして江戸時代に残された筥崎宮の絵図に描かれている「赤幡坊」の建物跡と推定される遺構（建物地業）がある。また出土遺物から、筥崎宮の創建当時の遺構も今後の調査によって発見できる可能性が指摘された。なお出土資料の一部は、粕屋郡総合庁舎ロビーに展示されている。

第３次調査（1990年1月～2月、箱崎１丁目地内、市教育委員会調査）

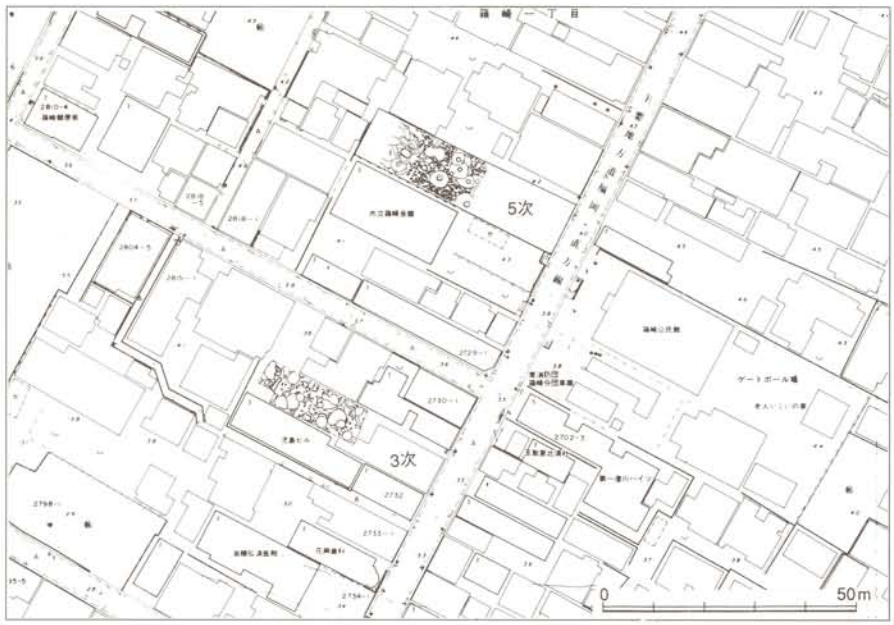
民間マンション建設に先立って調査。平安時代末から江戸時代までの土壙や井戸、溝を確認。これらの遺構からは、鎌倉から室町時代に中国から輸入された陶磁器が多量に出土しており、博多とともに箱崎が対外貿易の拠点だったことを再確認する貴重な資料となった。

第４次調査（1989年7月、筥崎宮境内、市教育委員会調査）

筥崎宮境内の工事中に瓦経が出土し、出土状況の観察とその他の遺構・遺物の有無の確認を目的として立ち合い調査を行なった。瓦経は総数36枚分出土し、内35枚が「仁王般若波羅密経」、１枚が「摩訶般若波羅密多心経」だった。この瓦経に伴う遺構は確認できていない。



Fig, 1　箱崎遺跡群と周辺の遺跡（1/35000）　1.　箱崎遺跡群　2.　博多遺跡群　3.　竪粕遺跡群　4.　吉塚遺跡　5.　元寇防塁推定線



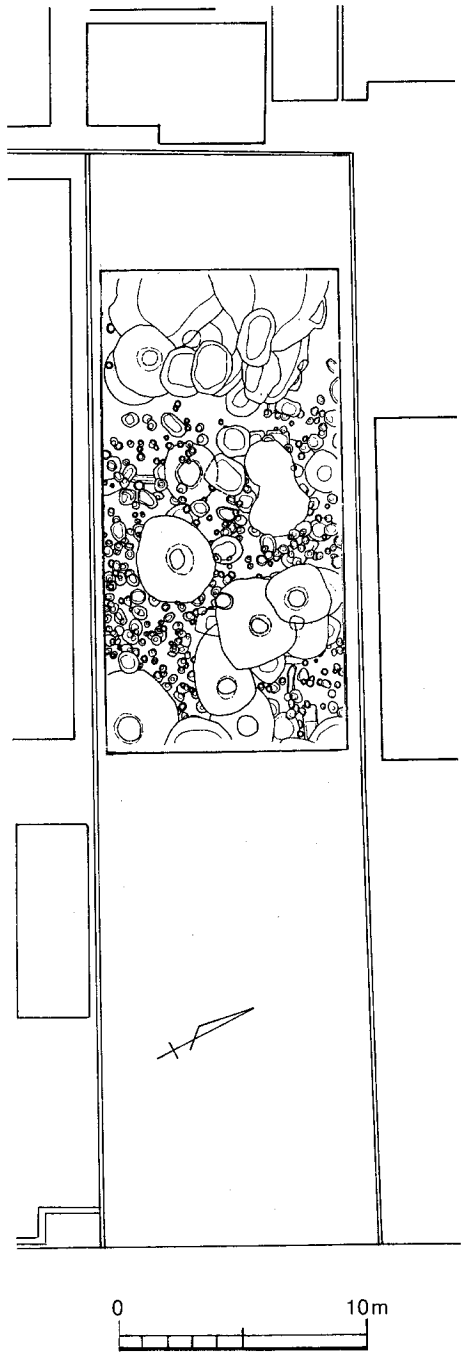
Fig, 2　第５次調査地点位置図（1/1500）

III　発掘調査の記録

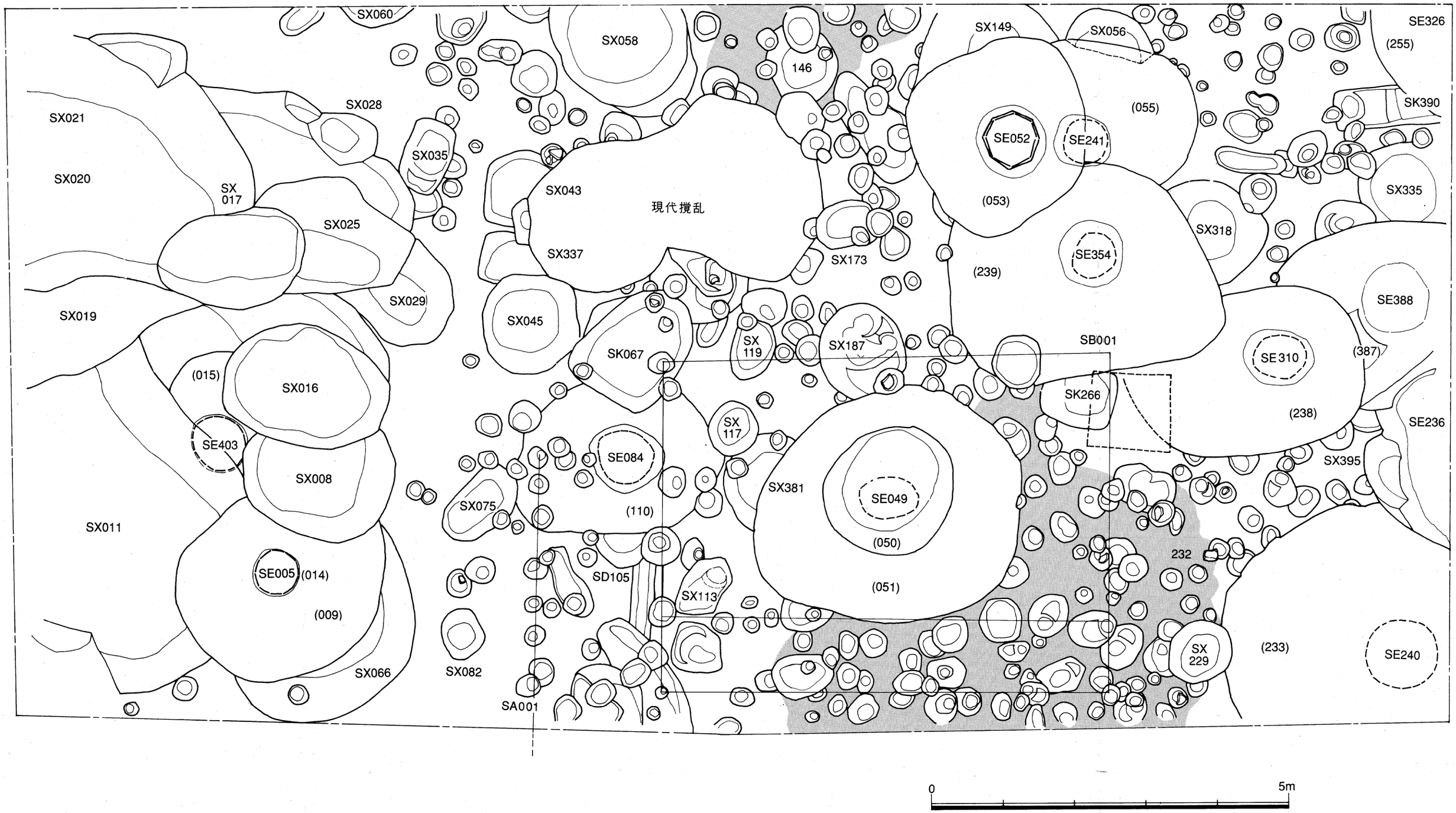
概要　第５次調査地点では、開発申請面積474.36m²のうち、建物建設予定の約210m²について調査した（Fig, 3)。

調査区内においては近世から近代にかけての撹乱が顕著なため遺構の遺存状況は良くない。調査区中央の基本的土層は次のようになる。現地表下、－50cmまでが現代の整地層で、その下部には約100cm厚で近世の遺物を多く含む黒褐色砂質土がみられる。この下部には20cm厚の暗褐色砂層がある。中世の遺物包含層である。地表下－180cmほどで基盤層の明黄褐色砂層となり、その上面で遺構が確認できる。検出面は緩やかに博多湾側(西北西方向)に傾斜しており、調査区中央で標高約2.8～2.9mを測る。調査区の南東部には固く締まった焼土層が約10cmほどの厚さで暗褐色砂層上に確認できた。後世の遺構によって寸断されているが、本来は少なくとも調査区の中央から東側にかけて分布していたものと考えられる。焼土層は出土遺物から中世後期に形成されたものと思われる。

検出された遺構は、柵列１条、掘立柱建物１棟、井戸12基、溝３条、土壙墓もしくは木棺墓４基、竪穴遺構42基、柱穴多数である。これらの遺構の時期は、出土遺物からみて、中世前期から後期、近世後期の三期に大きく分けられる。遺構は調査区全体にほぼまんべんなく分布しているが、調査区西側には、江戸期から近代の時期の新しい竪穴遺構が、また調査区の中央から東側にかけては中世の井戸が、また中世の柱穴は西側では少ないといった傾向があるなど、遺

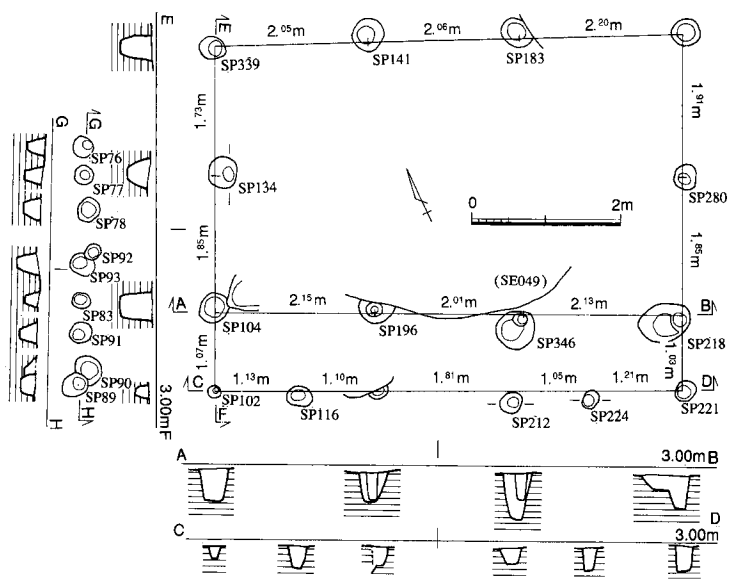


Fig, 3　調査区配置図(1/300)



Fig, 4　箱崎遺跡群５次遺構分布全体図(1/60)

構の種類とその形成された時期によって若干の分布上の違いが見られた。以下では検出された遺構と遺物について概述する。なお土師器坏・皿については、特にことわりがないかぎり底部はすべて回転糸切り離しの手法によるものである。



Fig, 5　柵列・掘立柱建物平面及び断面図(1/100)

1.　柵列（SA）

SA001（Fig, 5、PL, 2）

調査区の西側で検出された。柱穴間は１m前後で、４本確認されている。方向は掘立柱建物SB001の棟方向とほぼ直交しており、その位置と距離関係からみて、SB001に伴う塀だった可能性がある。

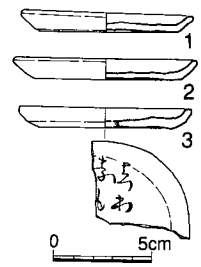
柵列を構成する柱穴からは土師器（皿・坏）片、口禿の白磁皿片が出土しているが図示し得るものはない。出土遺物やSB001の時期からみて中世後期のものと考えられる。

2.　掘立柱建物（SB）

柱穴は調査区全体にわたって分布している。分布密度はSA001を境にして西側がやや薄く東側（砂丘尾根側）に行くにつれ高くなる。狭い範囲であり、後世の遺構によって撹乱を受けていることから、建物の復元は難しいが、柱穴内の埋土の共通性によって、一つの案としてSB001を推定復元してみた。

SB001（Fig, 5、PL, 2）

調査区西側に位置する。中世後期の建物である。２×３間の間取で、南側に約半間幅の庇を持つ建物である。井戸SE354・土壙墓SK067に切られ、SE084を切っている。建物規模は桁行が6.29m、梁行が3.58mである。母屋部分の床面積は約22.52m²である。棟方向はN-66°-Wで、通称「大学通り」に対してほぼ直交している。柱穴は赤褐色の焼土・木炭片を多量に含んでおり、概要で述べた焼土層を掘り込んでいる。



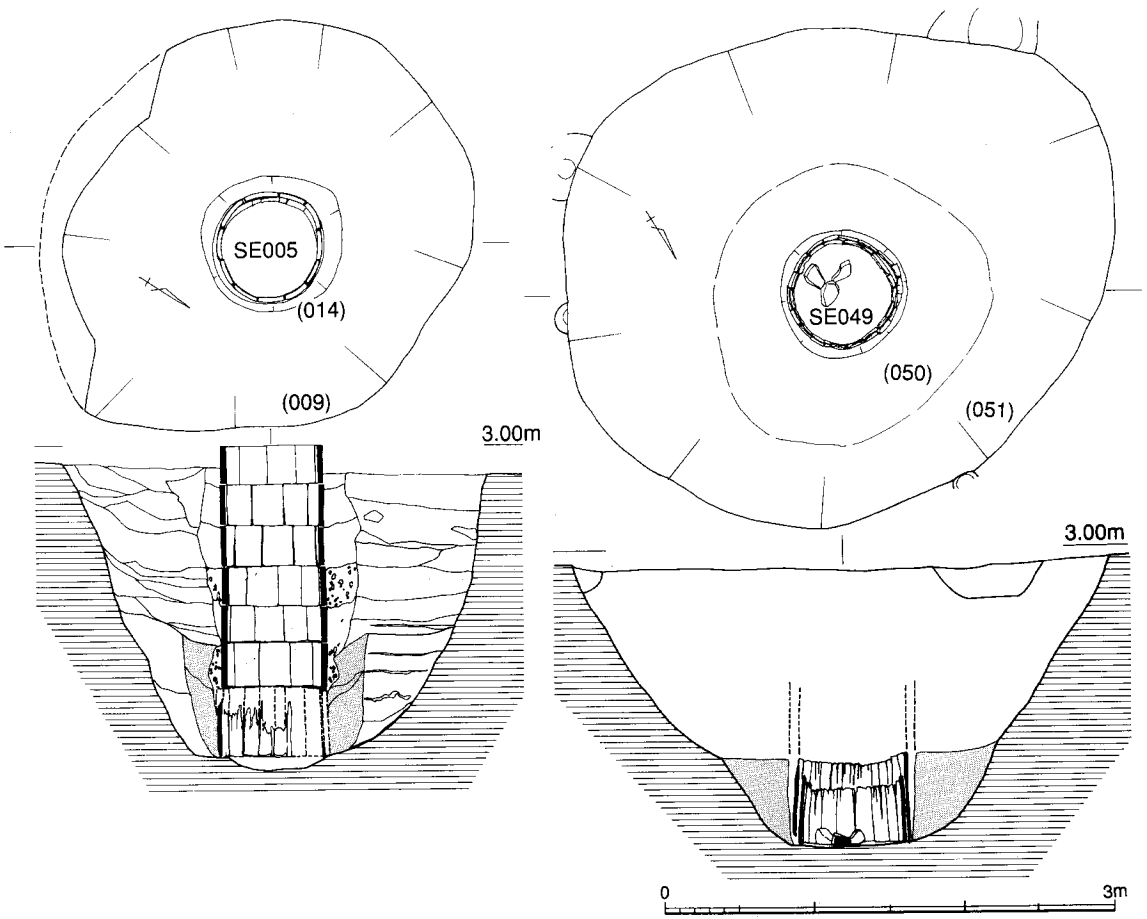
Fig, 6
柱穴出土遺物実測図(1/4)

出土遺物（Fig, 6、PL, 7、Tab, 1）建物を構成する柱穴からは、土師器（坏・皿）、龍泉窯系青磁片などが出土しているが、図示しうるものはわずかである。1～3はいずれも回転糸切離し底（以下糸切底と略する）の土師器皿である。口径は1・3が8.5・8.8cm、2は9.5cm。3の外底には「志わ・奈も・・」と読める墨書がみられる。

3. 溝（SD）

SD105（Fig, 4）

調査区中央からやや西寄りに位置する。幅は33cm。深さは検出面から18cm。断面形はU字形である。主軸はN-29°30-Eで、掘立柱建物SB001・井戸SE084・竪穴SX109などから切られている。



Fig, 7　井戸平面及び断面図1
(SE005、049、1/50)

4. 井戸（SE）

本調査地点では、12基の井戸を確認できた。特に調査区の中央から東側にかけて井戸が集中する傾向が認められ、水脈に沿って井戸が作られたと考えられる。これらのうち、井筒に曲物を用いたものはSE326、木桶を用いたものはSE005・049・084・240・241・310・388・354・403、板組みのものSE052、不明のものSE236である。SE005は井側が瓦組み、SE326は石組みである。その外の井戸は井側には木桶を用いた可能性がある。出土遺物からみて、中世前期のものがSE084、SE326で、中世後期のものがSE049・052・240・241・310・354・388・403、近世のものがSE236・005である。特にSE005は近代まで使用されていたもので、昭和初期に埋め戻されている。各井戸の現湧水面は、標高0．5～0．6m。

SE005（掘り方009・014）（Fig, 4・7、PL, 3）

調査区西南部で検出。瓦組の近世の井戸である。直径70cmの木桶を井筒に据え、その上に長さ25～27cm、幅18～22cm、厚さ3cm前後の瓦を10～12枚を単位に一段ずつ組み上げ井側を作っている。土層断面の観察では、瓦の一段ずつの組み上げと並行して裏込め作業が行われており、裏面には黄白色粘土を裏込めし瓦を固定している。掘り方は直径2.7～3.10m、深さは検出面から1.8m。SX066・SE403を切っている。

出土遺物（Fig, 12、PL, 2、Tab, 1）

井筒内005からは煉瓦やホーロウ製の洗面器、タイルのほか、日章旗と複葉機をあしらった必勝祈願の杯が出土しており近代まで使われたことがわかる。掘り方009・014からは土師器（皿4～9・坏10・11）、常滑窯甕片、東播磨系捏鉢、口禿の白磁皿片12、高台坏白磁13・14、青白磁梅瓶片、陶器甕片、龍泉窯系青磁・同安窯系青磁などが出土している。土師器坏・皿の口径平均値は12.1・7.7cmを測る。これらはSX066に本来含まれていたものがSE005掘削時に混入したと考えられ、SE005の時期的上限が中世後期まで遡らないと考えられる。

SE049（掘り方050・051）（Fig, 4・7、PL, 3）

調査区中央南側に位置する。直径65cmの桶を井筒とする中世後期の井戸である。井筒は木桶を二重にして据え置いている。外側の木桶は井側として、さらに数段重なっていた可能性がある。井筒内には、井戸の埋め戻しに際して、大量の土師器（皿・坏）が投棄されていた。掘り方は直径3.20m、深さは2.5m。

出土遺物（Fig, 13、Tab, 1）　井筒内からは土師器坏・皿が破片数にして坏が1124点、皿が339点（個体数にして116点以上）出土している。これらは埋め戻しに際して一括で投棄されたもので、井筒底部と底部から約40cm浮いた面に藁灰層をはさんで、2層に分かれ出土した。坏20～23・皿16～19はそれぞれほぼ同一形態であり、法量は、坏が平均口径12.8cm、皿が8.2cmである。これらのほかに、白磁碗、龍泉窯系青磁、褐釉陶器、黒釉天目碗片、石鍋、土錘などが

出土しているがいずれも二次的に混入したものである。

SE052（掘り方053・054）（Fig, 4・8、PL, 3）

調査区中央北側に位置する。中世後期の井戸である。井筒は幅28～30cm、長さ60～70cm、厚さ4～6cmの柾目材を鎹で組合せており、平面形が八角形をなす。SE354、SE241を切っている。掘り方は、直径2.60～2.80m、深さ2.60m。湧水面は標高0.50m。

出土遺物（Fig, 13、Tab, 1）　井筒内からは出土資料は少ない。土師器（坏・皿）、土鍋、瓦質土器（火鉢・摺鉢）口禿の白磁皿などが出土した。いずれも二次的に流れ込んだものである。掘り方054からは土師器坏片が164点、皿片が98点（法量の平均値は坏が12.9cm、皿が8.3cm）のほか、土鍋片、瓦器片、東播磨系捏鉢・甕片、口禿の白磁碗・皿片、龍泉・同安窯系青磁片、石鍋、土錘片などが出土している。

SE084（掘り方110）（Fig, 4・9、PL, 3）

調査区のほぼ中央に位置している。中世前期の井戸である。直径が60cmほどの桶を井筒としている。残りはあまり良くなく、土圧によって平面形は楕円形に歪んでいる。遺物は土師器坏・皿が井筒内中位に15点ほどまとまって出土した。井戸の掘り方は直径2.2～2.9m、深さは2.45m。SB001・SK067によって切られている。

出土遺物（Tab, 1）

SE084からは土師器が破片数で坏374点、皿231点出土。法量の平均値は坏が15.2cm、皿が8.8cmである。これらのほか龍泉・同安窯系青磁碗、白磁、青白磁皿、土人形などの破片が出土しているが、いずれも二時的に混入したものである。また掘り方110からは、土師器坏・皿、瓦器碗、東播磨系捏鉢、青白磁合子などが出土。土師器の法量平均値は皿が8．8cmである。

SE236（掘り方236）（PL, 3）個別図は示していない。

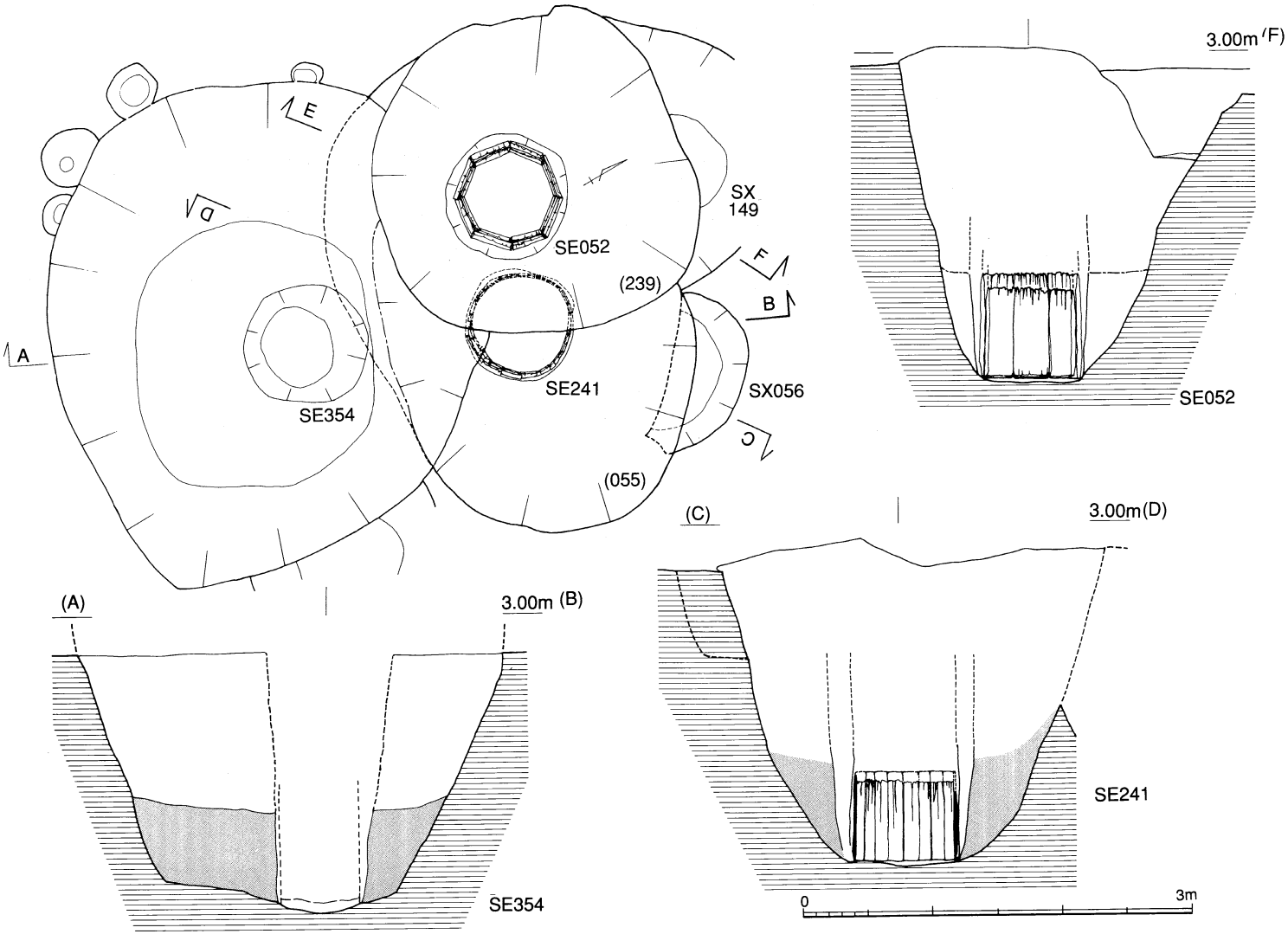
調査区の東端にかかって出土した。形状から井戸の掘り方と考えられた。調査作業の安全を考慮し完掘していない。SE240・310・388を切っている。

出土遺物（Tab, 1）

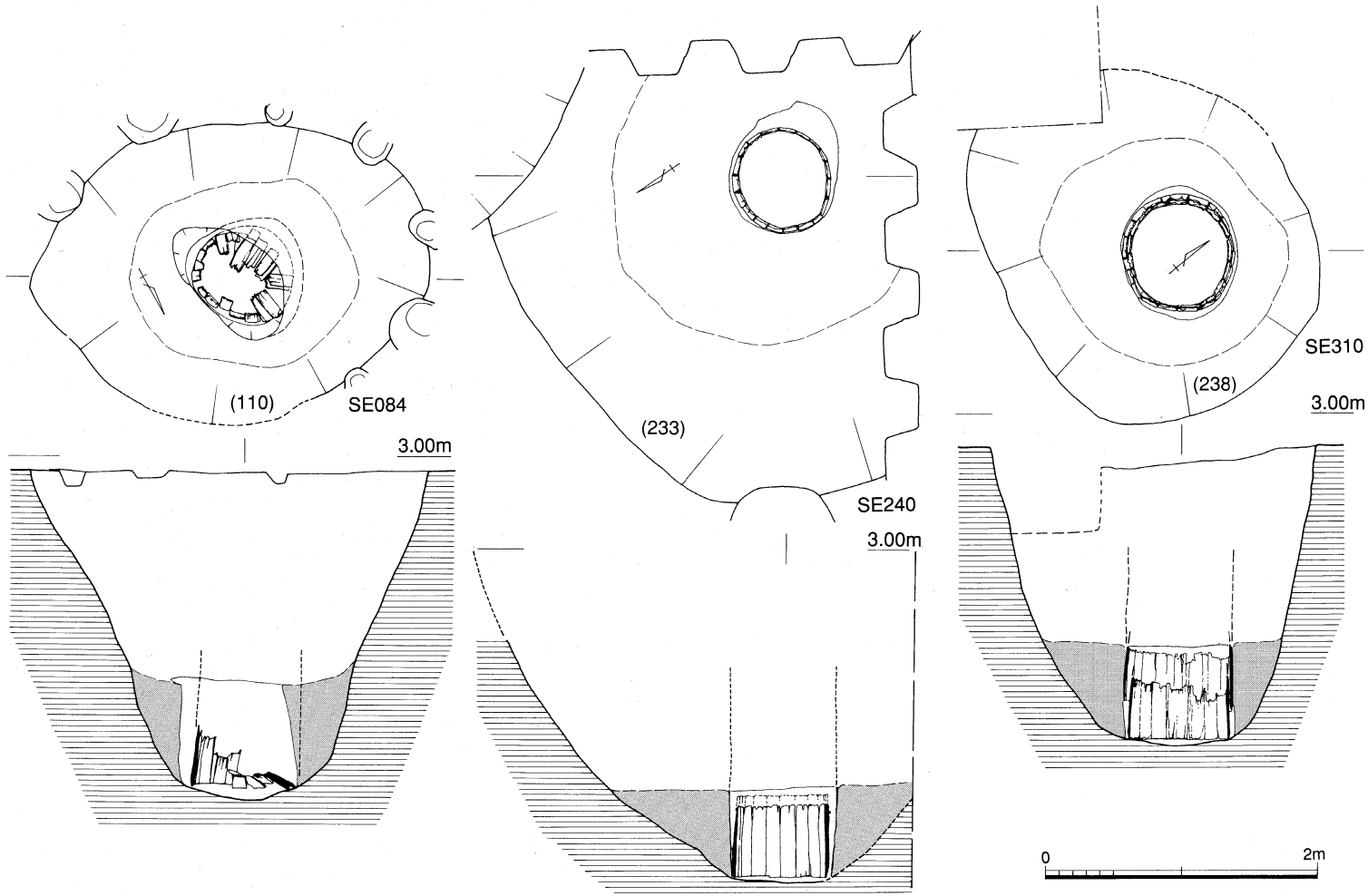
土師器坏片が71点、皿片が48点（法量の平均値は皿が8.8cm）のほか、東播磨系捏鉢、白磁碗片、龍泉窯系青磁碗・皿片、石鍋片が出土しているが、いずれも二次的な混入品である。

SE240（掘り方233）（Fig, 9、 PL, 4）

調査区東南隅に、掘り方の約四分の1がかかっている。井戸掘り方の大きさは12基中もっとも大きい。直径が75cmの木桶を井筒とする中世後期の井戸である。木桶の残りは悪く木質痕が残る程度である。木質の残り方からみて本来は3段以上の木桶の組合せがあったことが考えられた。他の井戸も同じ様に、おそらく木桶を数段重ねて、井側としていたものと思われる。掘り方233の推定直径は4.20m、深さは検出面から2.4m。SE236、SX229から切られている。



Fig, 8　井戸平面および断面図 2 (SE052・241・354)



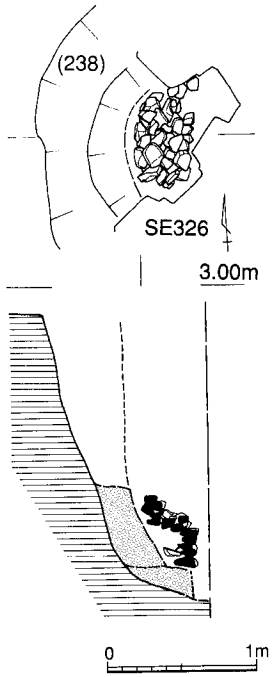
Fig, 9　井戸平面及び断面図 3 (SE084・240・310) (1/50)

出土遺物（Fig, 14、Tab, 1）

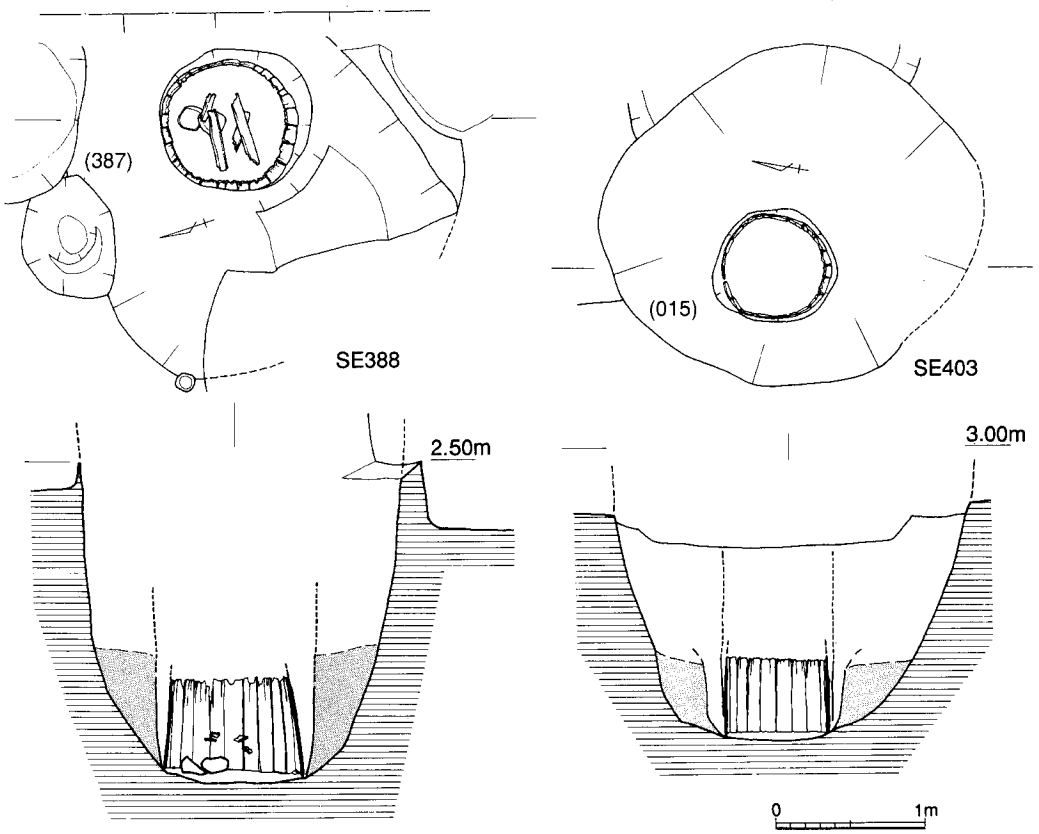
SE240からは土師器坏片が145点、皿片が96点（法量の平均値は皿が8.8cm）、常滑窯甕、東播磨系捏鉢、口禿の白磁碗、龍泉・同安窯系青磁、輸入陶器（甕・壷）、角釘、石鍋、土錘などが出土している。掘り方233からは、土師器坏57、皿52～54のほか、景徳鎮窯系の青白磁合子、白磁碗Ⅴ類58、口禿の白磁皿片、鉄滓、馬歯などが出土しているが、いずれも二次的な混入品である。

SE241（掘り方055）（Fig, 8、PL, 4）

調査区北東側に位置する中世後期の井戸である。直径75～77cmの木桶を井筒とする。木桶を井筒とする中ではもっとも大きい。井筒底部一面に藁灰層が5cm程の厚さで見られた。掘り方は直径が2.7～3.1m、深さは2.5mである。SX056・149、SE354を切り、SE052から切られている。



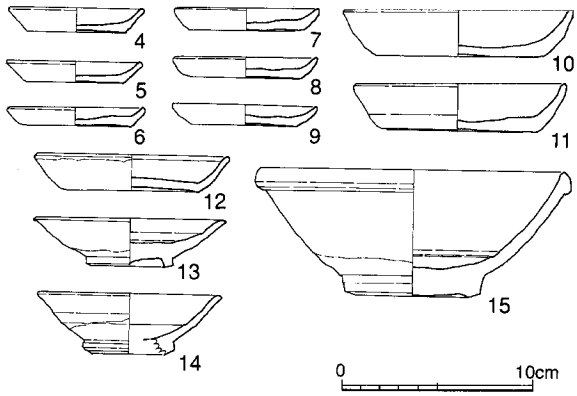
Fig,10　井戸平面及び断面図4
（SE326、1/50）



Fig,11　井戸平面及び断面図5（SE388・403、1/50）

出土遺物

SE241からは土師器坏片が388点、皿が188点(法量の平均値は坏が12.5cm、皿が8.8cm)のほか、瓦器片、東播磨系捏鉢、口禿の白磁碗などが出土している。掘り方055からは土師器片のほか青白磁皿片などが出土しているがいずれも二次的に混入したものである。



Fig,12　井戸出土遺物実測図1(1/4)

SE310(掘り方238)(Fig,9、PL,4)

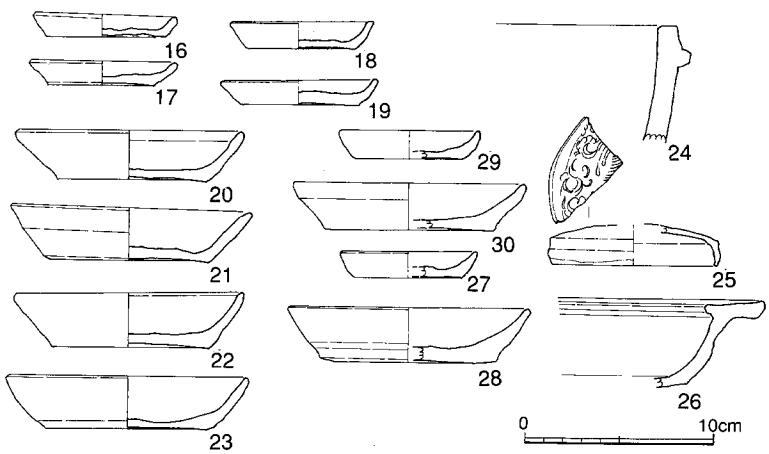
調査区北東側に位置する中世後期の井戸である。直径65～70cmの木桶を井筒としている。木桶は二重になっているが、外側の木桶は井側にあたる。木桶の残りは悪く木質がわずかに残っている程度である。掘り方は小さく、直径2.4m、深さ2.2mを測る。

出土遺物 (Fig,14、Tab,1)

SE310からは、土師器坏片が197点、皿片が72点(55・56、法量の平均値は皿が8.7cm)のほか、瓦器皿片、白磁碗、青白磁皿、龍泉窯系青磁片などが出土している。掘り方238からは土師器坏片が32点、皿片が4点のほか、瓦器碗片、東播磨系捏鉢片、青白磁皿片、陶器盤などが出土している。いずれも二次混入である。

SE326 (掘り方255) (Fig,4、10)

調査区東北隅で約4分の1ほど確認された。石組の井側で、おそらく曲物を井筒とする中世前期の井戸である。土留め用シートパイルによってかなり石組は壊されている。握り拳大から人頭大の扁平な自然礫を用いて、井側を構築している。井筒は明確ではないが、直径が約45～50cmほどと思われる。他の井戸と比べると井筒の容量は小さい。SK390を切っている。



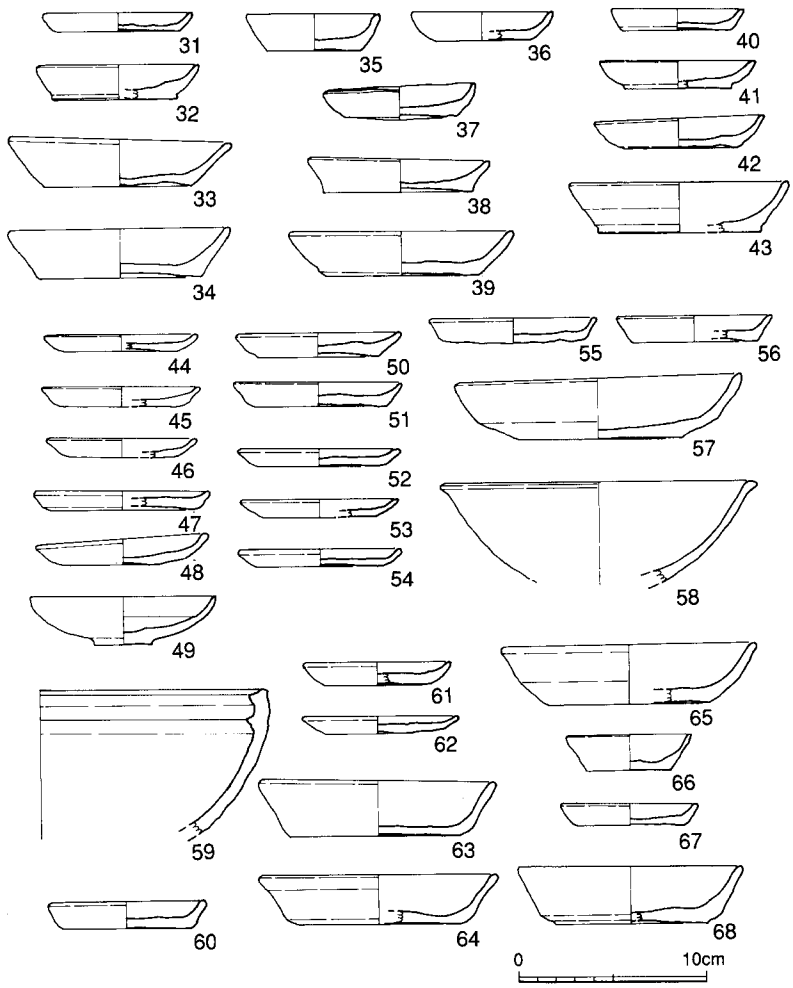
Fig,13　井戸出土遺物実測図2(1/4)

出土遺物(Fig, 14、Tab, 1)

SE326からは土師器坏片18点、皿片14点、瓦質摺鉢・釜、東播磨系捏鉢などが出土。掘り方255からは、土師器坏片が160点、皿片が194点(61・62、法量の平均値は皿が8.9cm)のほか、瓦器碗、東播磨系捏鉢、龍泉窯系青磁碗片、白磁碗片、口禿の白磁皿片などが出土している。

SE354(掘り方239)(Fig, 4・8、PL, 4)

調査区東側に位置する中世後期の井戸である。井筒には木桶を用いたと思われ、板材の痕跡が若干残っている。直径は約60cm程で他の木桶を用いた井戸と比べると小型である。SB001、SE310・241、SK266、SX318を切り、SE052から切られている。



Fig,14　井戸出土遺物実測図3 (1/4)

出土遺物 (Fig, 14、Tab, 1)

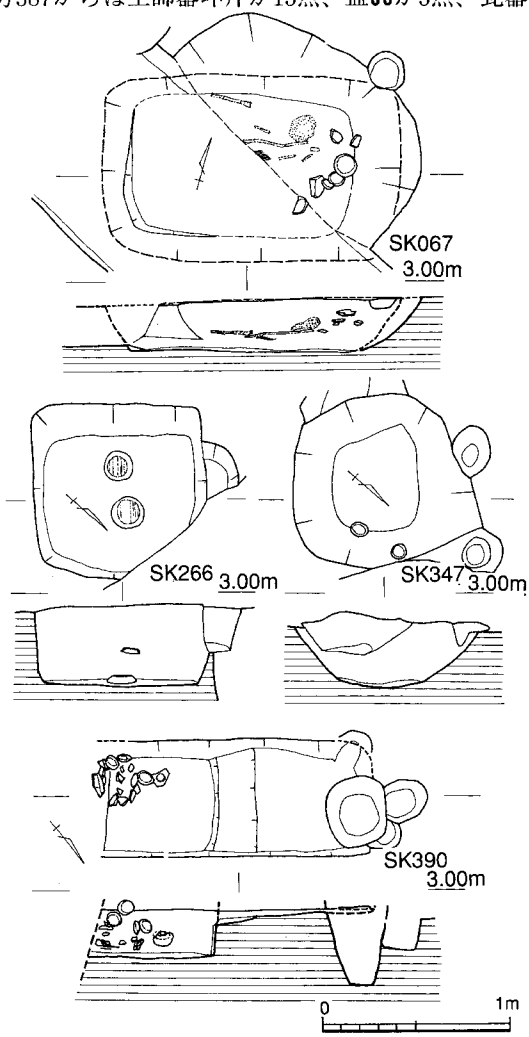
SE354からは、土師器坏が179点(39)、皿が62点(35～38、法量の平均値は坏が13.3cm、皿が8.7cm)のほか、瓦器碗・皿片、東播磨系捏鉢、口禿の白磁碗、李朝白磁碗、龍泉・同安窯系青磁、石鍋、土錘などが出土している。掘り方239からは土師器坏片が262点(43)、皿が208点(40～42、法量の平均値は坏が13.0cm、皿が9.0cm)のほかに、土鍋片、瓦器碗・皿、瓦質摺鉢、常滑窯甕片1、東播磨系捏鉢、白磁四耳壺片、口禿の白磁皿片、布目瓦片、天目碗片、銅銭、石鍋、羽口、鉄滓などが出土している。いずれも二次的に混入したものである。

SE388（掘り方387）（Fig, 4・11、PL, 4）

調査区東端に位置する中世後期の井戸である。井筒には木桶を用いている。土圧によって楕円形に歪んでいる。直径は70～75cmである。井筒内には上部の井側に用いていたと思われる木桶の板材が落ち込んでいた。掘り方は直径2.1～2.3m、深さ2.2mで、壁はほぼ垂直に立っている。SE388を切り、SE354・236から切られている。

出土遺物（Fig, 14、Tab, 1）

SE388からは、土師器坏片が15点、皿片が3点、瓦器片、東播磨系捏鉢、白磁碗、口禿白磁皿、龍泉・同安窯系青磁、褐釉四耳壷片などが出土。量は少ない。いずれも二次混入である。掘り方387からは土師器坏片が15点、皿**60**が3点、瓦器片、東播磨系捏鉢、白磁碗、常滑窯甕などが出土している。



Fig,15　土壙・木棺墓平面及び断面図
（SK067・266・347・390、1/40）

SE403（掘り方015）（Fig, 4・11）

調査区西側に位置する。直径60～65cmの木桶を井筒とする中世後期の井戸である。掘り方の上部は近世以降の撹乱によりほとんど失われており本来の形状は不明である。現存の掘り方の直径は2.4～2.6m、深さは1.55m。本井戸周辺の遺構の先後関係は、SE403→SX404→SX011→SE005→SX008→SX016である。

出土遺物（Fig, 14、Tab, 1）

SE403からは、土師器坏片が15点（**63・64**）、皿片が3点（法量の平均値は坏が12.9cm）、口禿の白磁皿、瓦質摺鉢、白磁四耳壷、青白磁皿、龍泉窯系青磁碗などが出土している。掘り方404からは、土師器坏**68**、皿**67**が出土。

5.　土壙・木棺墓（SK）

今回の調査においては4基の墓と思われる土壙が確認された。これらのうち明確に墓とすることができるのはSK067であり、人骨の痕跡が確認できた。他の土壙については、人骨は確認できなかったが、土壙の掘り方の形態や、遺物の出土状況から墓と考えられた。

SK067（Fig, 4・15、PL, 6）

調査区のほぼ中央に位置する。中世後期の木棺墓である。試掘調査時に掘り方上半分は削平されており、遺存状況はあまり良くない。平面形はやや寸づまりの長方形で、長軸が1.6m、短軸が約1.1mを測る。掘り方床面から10cmほど浮いた面に粉状に風化した人骨がみられた。その下部にはわずかであるが棺材と考えられる木質の痕跡がみられた。頭骨は、掘り方北東部に位置している。墓壙の規模からみて被葬者は仰臥伸脚によって埋葬されたことが考えられる。墓壙は、SB001、SE084、SK347を切っている。

出土遺物（Fig, 16）

副葬品は土師器坏**69**・**67**が2点である。埋土中から二次的混入品として、土師器坏片110点、皿片32点、瓦器碗・皿片、白磁VI類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、黒釉茶入・盤などが出土している。

SK266（Fig, 4・15）

調査区東側に位置する。中世前期の土壙である。土壙掘り方東側を試掘トレンチで、北側をSE354で壊されており、遺存状況はあまり良くない。平面形は一辺が90cm前後の方形で、現存の深さは45cmである。人骨は確認できなかった。副葬品と考えられる土師器坏が床面中央で２点出土している。

出土遺物（Fig, 16）

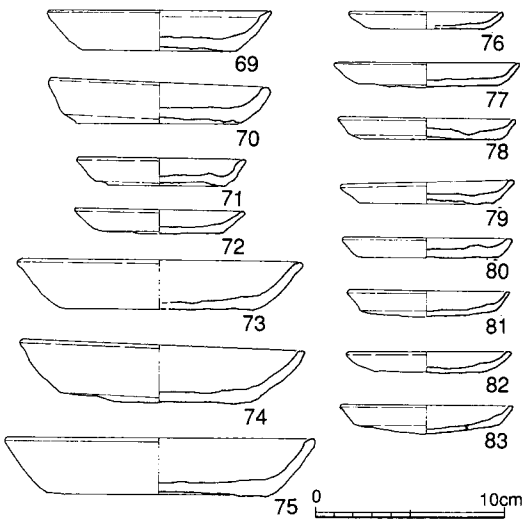
副葬品と考えられる土師器坏**72**～**75**の３点以外は、二次的に混入したものである。土師器坏片が94点、皿が90点（**71**・**72**、法量平均は坏が15.7cm、皿が9.1cm）、土鍋片、瓦器碗・皿片、白磁碗Ⅴ類、同安窯系青磁碗Ⅱ類などの破片が出土している。

SK347（Fig, 4・15）

調査区中央に位置する。中世前期の土壙である。土壙掘り方北側を現代の下水処理槽で、南西部をSK067で壊されており、遺存状況はあまり良くない。平面形は一辺が90cm前後の不整な方形で、床面は舟底状である。埋土は黒褐色砂質土で、床面近くには灰層が２～３cmの厚さで堆積していた。副葬品と思われる土師器皿２点が土壙北側にみられた。

出土遺物（Fig, 16）

土師器坏片が34点、皿が８点（**76**～**78**、法量平均は皿が9.3cm）、角釘が出土している。釘は二次的な混入品か。



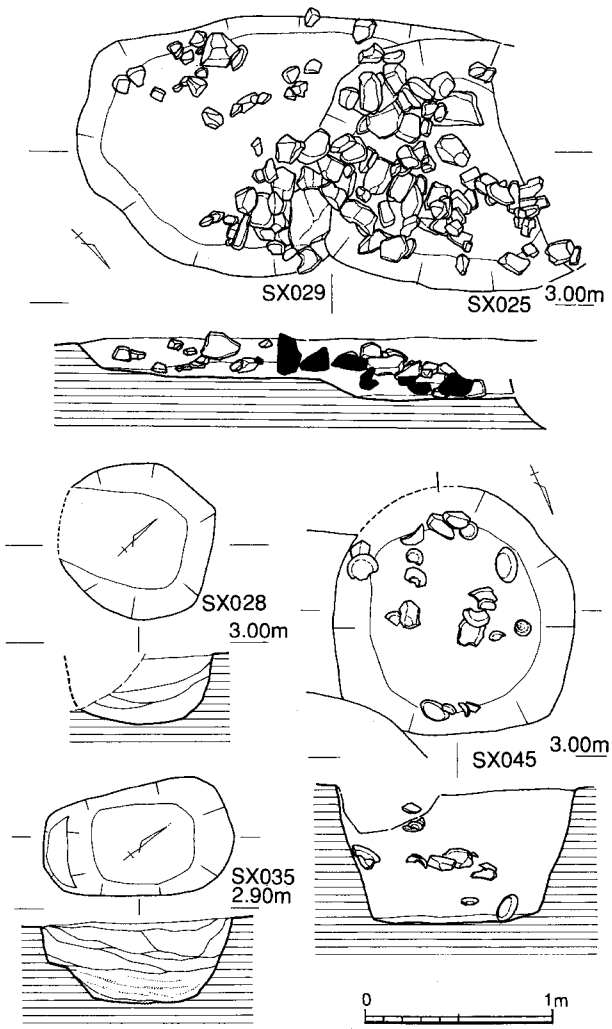
Fig,16　土壙・木棺墓出土遺物実測図(1/4)

SK390（Fig, 4・15、PL, 6）

調査区東北端に位置する。中世前期の土壙である。SE326から東側掘り方を削平されており、さらにシートパイルによって破壊されており本来の土壙の規模は不明である。平面形は長方形で、長辺が1.0m、短辺が0.6mを測る。掘り方南壁側に副葬品と思われる土師器坏・皿がまとまって出土した。

出土遺物（Fig, 16）

土師器坏片が140点、皿が85点（**79**～**83**、法量平均は皿が9.6cm）、土鍋片、瓦器碗、東播磨系甕片、白磁碗Ⅴ類、皿Ⅲ・Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類、同安窯系青磁皿などが出土している。



Fig,17　竪穴遺構平面及び断面図1
（SX025・028・029・035・045、1/40）

6.　竪穴遺構（SX）

検出した遺構のうちその性格が不明なものについては竪穴遺構として「SX」を付した。調査区からは42基の竪穴遺構が確認された。形態的には、1、平面形がやや不整な円形で、断面形が深い台形もしくは深い鉢状をなす大型のもの（SX045・056・058・149・187・318・335・395）、浅皿状で大型のもの（SX008・011・016～018・025・029・060・138・381）、また小型のもの（SX030・109・146・213・229・232・261・334・341・386）、2、平面形がやや不整な楕円形で小型の竪穴（SX023・028・035・036・075・113・173・177）、3、不整な方形で長方形のもの（SX043・337）、4、不定形で、整地もしくは土溜りと考えられる浅い皿状のもの（SX022・024・154・404）の4つに大きく分類できる。これらの遺構は、中世前期（SX035・036・043・045・056・058・138・146・149・154・318・337・381）のもの、中世後期のもの（SX023・028・030・075・113・154・173・177・187・213・229・232・261・334・335・341・386・395）、

近世後期のもの（SX008・011・016～018・022・024・025・029・060・404）に分けられる。

SX025（Fig, 4 ・17、PL, 5）

調査区東側に位置する。一括投棄された拳大から人頭大の自然礫を多量に含む竪穴である。埋土は暗灰色砂質土で、木炭片を多く含んでいる。長軸推定1.7m、短軸1.3m、深さ0.35m。

出土遺物　近世染付、近世瓦のほか、土師器（坏・皿）、口禿の白磁皿、龍泉窯系青磁碗などが混入している。

SX028（Fig, 4・17、PL, 5）

調査区東北部に位置する。近世の遺構にほぼ半分が削平されている。埋土は暗灰（褐）色砂質土で、木炭片を含んでいる。長軸・短軸とも約0.8m、深さ0.35m。

出土遺物　土師器坏・皿、瓦器碗、東播磨系捏鉢が出土。土師器皿の法量は口径約7.8cm。

SX029（Fig, 4・17）

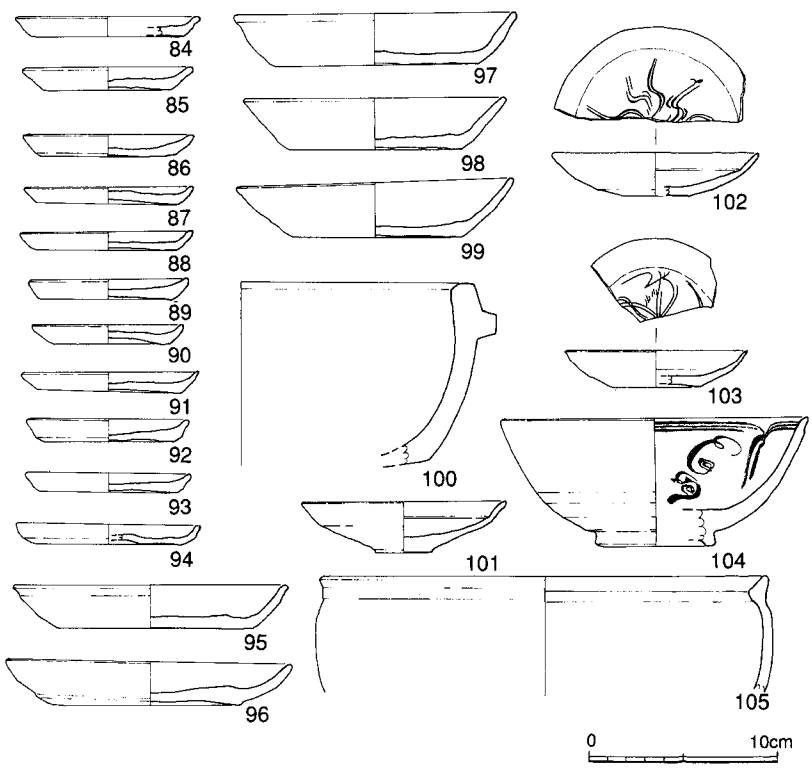
SX025に北西側を切られている。SX025と同様に一括投棄された自然礫を多く含む竪穴である。長軸推定約1.8m、短軸1.5m、深さ0.22m。近世染付、唐津系陶器、近世瓦などのほか、土師器坏・皿、土師器質土鍋、瓦質火鉢、中国産白磁、龍泉窯系青磁などが出土している。

SX035（Fig, 4・17）

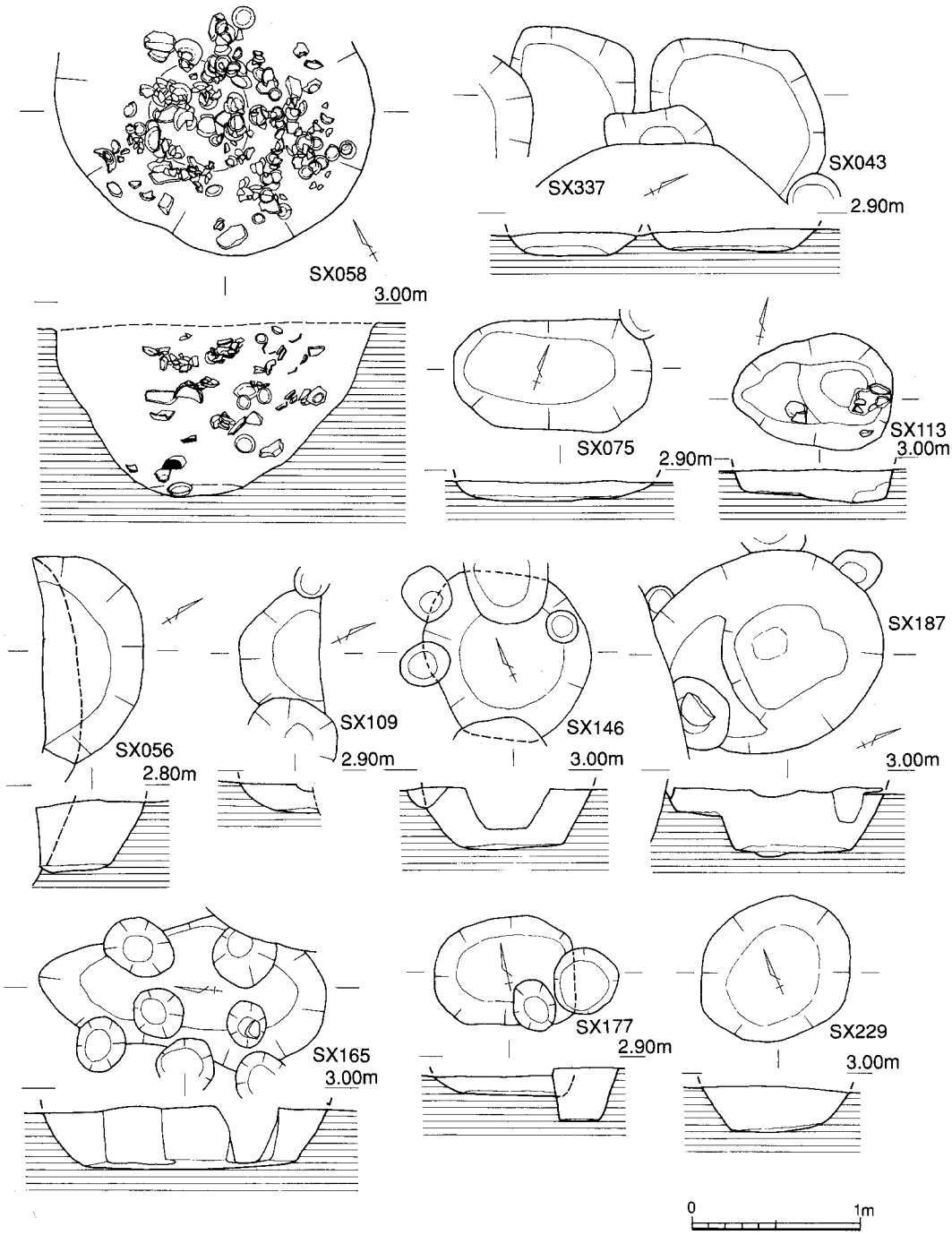
調査区北東部に位置する。形態的にはSX028とよく似る。西南部壁には平坦な段がある。長軸1.03m、短軸0.58m、深さ0.44m。

出土遺物（Fig, 18、PL, 7）

土師器皿・坏・碗、瓦器碗、白磁碗V類などが出土している。二次的混入によるものである。土師器皿**84・85**は糸切底で、口径9.8～9.0cm。口径平均値は9.4cm。



Fig,18　竪穴遺構出土遺物実測図(1/4)



Fig,19 竪穴遺構平面及び断面図 2
(SX043・056・058・075・109・113・146・165・177・187・229・337、1/40)

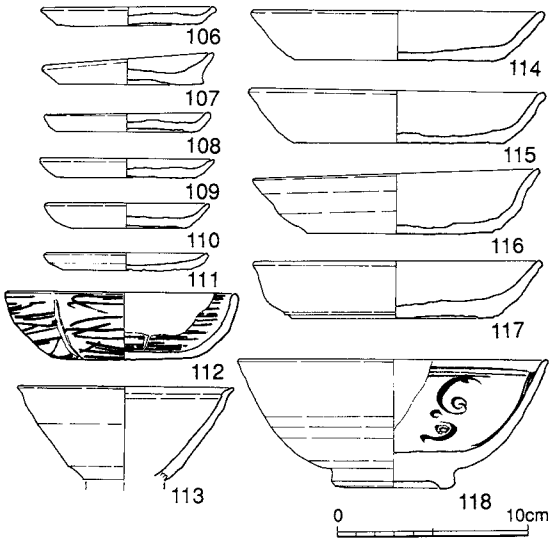
SX043（Fig, 4・19）

調査区中央からやや西側に位置する。埋土は暗褐色砂質土で残りは非常に悪い。平面形はあまり鮮明でなかった。隅丸の長方形をなすものと思われる。

出土遺物(Fig, 21、PL, 7)　遺物は土師器碗・坏・皿、土鍋、瓦器碗・皿、白磁碗V類が出土している。いずれも小片で二次的な混入である。

SX045（Fig, 4・17、PL, 5)

調査区中央からやや西側に位置する。平面形は円形で、断面形が逆台形状になる。埋土は暗褐色砂質土で下部に行くほど黒味が強い。直径1.25～1.30m、深さ0.7m。



Fig,20　竪穴遺構出土遺物実測図 2 (1/4)

出土遺物　(Fig, 18、PL, 7)　遺物はすべて投棄された状態で出土した。土師器碗・坏**95～99**・皿**86～94**、土師質土鍋、瓦器碗、東播磨系捏鉢、中国産白磁碗（IV・V類)、同安・龍泉窯系青磁碗**104**・皿、青白磁皿**102・103**、輸入陶器捏鉢**105**・大型壷片などが出土。土師器坏・皿の口径平均値は皿が9.1cm、坏が14.9cm。

SX056（Fig, 4・17)

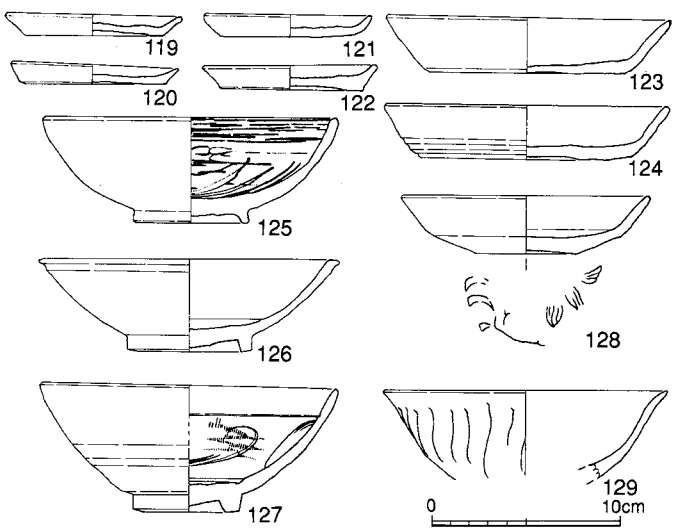
調査区北東部に位置する。SE241に半分以上が切られており、遺存状況は悪い。直径は推定1.3m、深さ0.45m。埋土は暗褐色砂質土で木炭片が目立った。遺物は土師器皿の小片が若干出土したのみで、いずれも2次的混入。

SX058（Fig, 4・19、PL, 5)

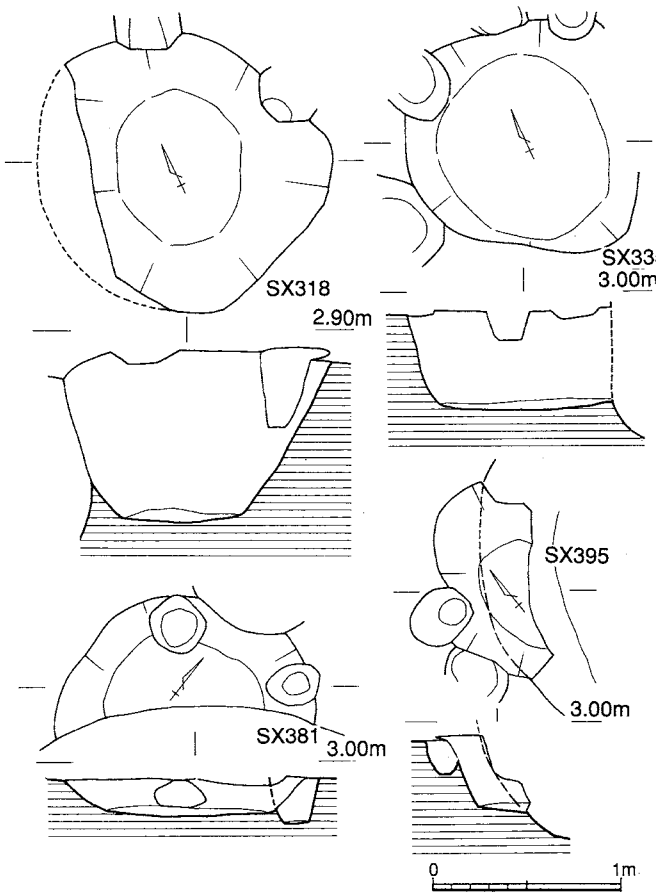
調査区北側中央壁にかかっている。平面形は円形で断面形は深い鉢状である。黒褐色粘質土を挟んで上下2層に遺物が層を成して出土している。直径1.75～1.80m、深さ1.1m。

出土遺物（Fig, 20・21、PL, 6)

遺物はそれぞれの層で一括投棄



Fig,21　竪穴遺跡構出土遺物実測図 3 (1/4)



Fig,22　竪穴遺構平面及び断面図３(1/40)

されたものである。土師器碗、坏(**114～117**)片1142点、皿(**106～111**)破片420点(口径の法量平均値は上層で坏が15.1cm、皿が9.2cm、下層で坏が15.2cm、皿が9.6cm)、土師質土鍋、瓦器坏**112**、碗・皿、摺鉢、東播磨系捏鉢、白磁碗II・IV・V・VIII類、白磁皿**128**・四耳壷、同安・龍泉窯系青磁碗**118**、輸入陶器鉢・四耳壷、褐釉水注、黒釉天目碗**113**、盤、銅銭、青白磁合子などが出土。

SX075 (Fig, 4・19)

調査区東側に位置。埋土は黒褐色砂質土。残りはあまり良くない。長軸が1.2m、短軸0.65m、深さ0.12m。

出土遺物　土師器坏片と瓦器碗片が各１点出土したのみである。いずれも２次的混入である。

SX109 (Fig, 4・19)

調査区南西部に位置。SE084から北側壁を、SP111から東壁を切られている。埋土は暗褐色砂質土。直径は推定0.75m。深さ0.15m。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。

SX113 (Fig, 4・19)

調査区中央南側に位置する。赤褐色の焼土、木炭片、羽口片・鉄滓小片を含んだ竪穴である。二次的に混入したものであり、竪穴そのものに伴うものではない。なお竪穴の壁は焼けていない。長軸0.95m、短軸0.65m、深さ0.18m。

出土遺物　土師器碗・坏・皿、土鍋片、須恵質甕、白磁碗II・IV・V類、皿V類が出土している。いずれも二次的な混入品である。

SX146 (Fig, 4・19)

調査区中央北側に位置する。SP145・159から切られている。埋土は暗～黒褐色砂質土で、木炭片が目立った。直径は1.0～1.2m、深さ0.36m。

出土遺物　土師器坏・皿、瓦器碗・皿、須恵質鉢、白磁碗Ⅴ・Ⅸ（口禿）類、滑石製石鍋、土錘、同安窯系青磁皿などの小片が二次的に混入した状態で出土。

SX165（Fig, 4・19）

調査区中央部に位置する。柱穴によって寸断されており残りは良くない。埋土は暗～黒褐色砂質土である。木炭片がやや目立った。長軸1.7m、短軸1.0m、深さ0.38m。

出土遺物　土師器坏・皿片、東播磨系捏鉢、白磁碗Ⅴ類・皿Ⅳ類、滑石製石鍋などが出土。

SX177（Fig, 4・19）

調査区中央からやや東に位置する。埋土は黒褐色砂質土。残りは良くない。輪郭の把握が難しかった。長軸0.84m、短軸0.65m、深さ0.11m。

出土遺物　土師器坏・皿の小片が出土している。いずれも二次的混入品である。

SX187（Fig, 4・19）

調査区中央に位置する。柱穴によって掘り方が寸断されている。床面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質土である。直径1.2～1.5m、深さ0.38～0.40m。

出土遺物　土師器坏・皿（皿の口径平均値は9.0cm）、瓦器碗・皿、白磁碗Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗、青白磁合子などが出土。いずれも二次的混入品である。

SX229（Fig, 4・19）

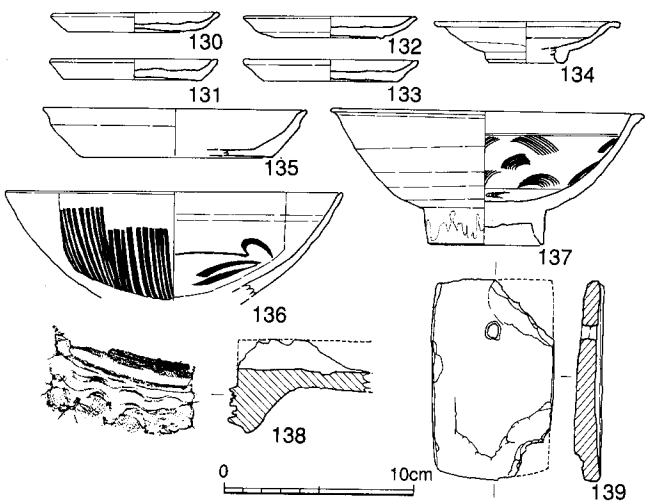
調査区南東側に位置する。SE240を切っている。埋土は灰色粘土と褐色砂質土で、固くしまっていた。一時的に埋め戻されたものと思われる。遺物はいずれも二次的な混入である。

出土遺物　土師器坏・皿（口径法量平均値は坏が12.2cm、皿が8.0cm）、瓦器碗、常滑窯甕、東播磨系捏鉢、白磁碗Ⅴ類、皿Ⅸ(口禿)類、龍泉窯系青磁大皿、褐釉四耳壷などが出土。

SX318（Fig, 4・22）

調査区北東側に位置する。SE354から西側半分を切られている。平面形は本来はかなり整った円形だったと思われる。床面は平坦である。埋土は一時的に埋め戻されており、暗～黒褐色砂質土である。直径1.5m、深さ0.95m。

出土遺物　土師器坏**135**・皿**130～133**（口径法量平均値は坏が14.4cm、皿が9.1cm）、土鍋、瓦器碗・皿、瓦質摺鉢、東播磨



Fig,23　竪穴遺構出土遺物実測図４(1/4)

系捏鉢、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類**137**・皿**134**、青白磁皿、同安窯系青磁碗**136**、瓦**138**などが出土している。いずれも二次的な混入品である。

SX335 (Fig,4・22)

調査区東端に位置する。SE388から南壁を切られている。埋土は暗灰褐色砂質土で、掘り方内上部には15cmほどの自然礫がまとまってみられた。

出土遺物　土師器坏・皿、同安窯系青磁碗などの小片が出土。いずれも二次的な混入品。

SX337 (Fig,4・19)

調査区中央からやや西側に位置する。埋土は暗褐色砂質土で残りは非常に悪い。平面形は不鮮明である。隅丸の長方形をなすものと思われる。

出土遺物　遺物は土師器坏・皿、瓦器碗が出土している。いずれも小片で二次的な混入品。

SX381 (Fig,4・22)

調査区中央に位置する。SE084・049から東西壁を切られている。残りは良くない。埋土は暗褐色砂質土で、輪郭は不鮮明であった。直径1.35m、深さ0.20m。

出土遺物　土師器碗・坏・皿片、瓦器碗、須恵器甕、白磁皿Ⅳ類、滑石製石鍋。スサ入りの粘土塊などが出土している。いずれも二次的混入である。

SX395 (Fig,4・22、PL,3)

調査区東端に位置する。SE0236から切られており、残りは非常に悪い。暗～黒褐色粘質土を埋土とする。遺存部分から推定してSX318・335と同様な形態の竪穴と思われる。推定直径は0.90～1.0m、深さは0.40m。

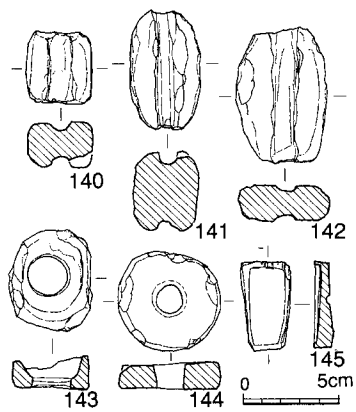
出土遺物　遺物は少ない。土師器坏・皿、須恵器甕、白磁碗Ⅴ類、四耳壺などの小片が出土している。

7.　その他の遺構と遺物

整地層 (SX057・407) (Fig,24、PL,8)

調査区の中央部南から東側にかけて、赤褐色の焼土、木炭などを含む、固くしまった土層が観察できた。掘立柱建物SB001との位置関係からみて、土間部分とも考えられるが、居住のための簡単な整地を行ったことは間違いないものと思われる。時期的には井戸等の切り合い関係からみて中世後期のものと思われる。

出土遺物　土師器坏・皿片のほか滑石製石錘**140**～**143**、紡錘車**144**、硯**145**が出土している。石錘は38.9～416.gで、仕掛け網、投げ網用のものと思われる。



Fig,24　その他の遺物実測図(1/4)

Ⅳ　おわりに

以上調査の所見について述べてきたが、以下では今回の調査の成果と今後の課題についてまとめておく。

今回の調査では、第３次調査と同様に集落関係の遺構群がかなり良好に残っていることが確認できた。検出遺構は柵列・掘立柱建物・柱穴・井戸・土壙木棺墓・廃棄用竪穴などで、それらの時期は一部古代末にかかるものもあるが、主に中世前期（鎌倉）から近世後期にわたるものであった(各遺構の所属時期については各遺構別の項で説明済みである)。遺構は桶組井戸を始めとする中世後期のものが多いが、遺物の上からは中世前期に含まれるものが量的に多い。なお近世前期と確定できる遺構は確認できていないが、遺構の廃棄時期からみて近世後期に含めた可能性がある。

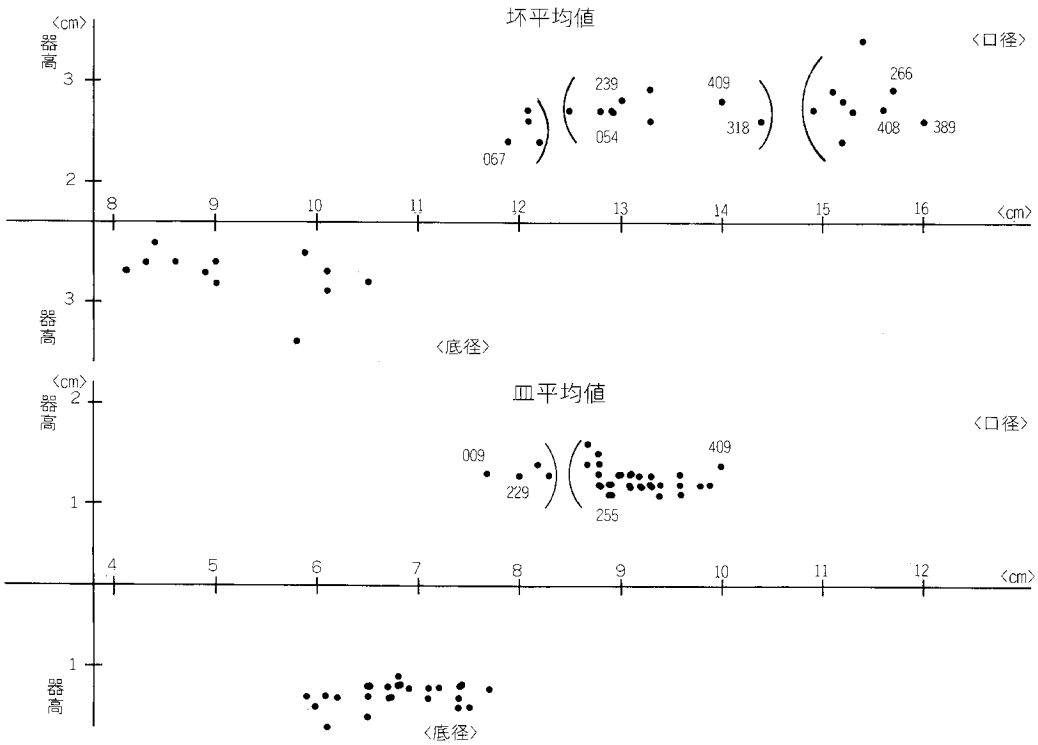
第３・５次調査の出土遺物からみた本地点周辺の遺跡形成の上限は現在までのところ古代後期（11世紀頃）まで遡るが、それ以前の遺構・遺物は未検出である。筥崎宮創建当時（10世紀半ば頃）の遺構の確認が今後の調査で期待される。

中世前期と後期を面的に分けられる整地層（建物の土間もしくは生活面）を確認できたが、今回は調査期間の制約もあり遺構の時期区分を十分行えなかった。砂丘上に形成された集落遺跡の調査においては有効な時期比定の土層となりうるので、周辺の調査では、留意すべき点であると思われる。

箱崎遺跡群全体からみた、これらの遺構の分布の在り方や範囲については今後の調査によらねばならないが、少なくとも、遺跡が立地する古砂丘の尾根に沿って第１次調査地点である馬出付近から南北に細長く続いていたものと予想される。しかも、掘立柱建物の復元によって中世後期頃までには筥崎宮の方向性に少なからず規制されていたと考えられたことは、今後の箱崎遺跡群における集落の景観復元を考える上で大きな成果となった。

なお当該地点が遺跡群内において最も標高が高い地点に近接していることと、柱穴が第３次調査と比べかなり多くなってきていることから、筥崎宮北側における遺跡の中心が当該地点の北方に近接していると考えられた。

ところで箱崎遺跡群内においては市営地下鉄開通以来、マンション建設などの民間による小規模な開発が虫食い的に進行しており、さらに九州大学移転構想や、「大学通り」の拡幅などの公共工事が将来計画として上がるなど、各種の開発が目白押しの状況である。箱崎遺跡群の内容の把握とその歴史的評価を再確認するためにも、事前調査の体制を早急に整える必要がある。



Gr, 1　遺構別出土土師器＜坏・皿＞平均法量グラフ

遺構番号	器種	資料数	口径 最大値	口径 平均値	口径 最小値	器高 最大値	器高 平均値	器高 最小値	底径 最大値	底径 平均値	底径 最小値
005	坏	2	12.1	12.1	12.1	2.7	2.7	2.6	9.2	8.9	8.6
009	皿	25	8.6	7.7	7.1	1.6	1.3	0.9	6.8	5.9	5.2
	坏	17	13.2	12.1	11.3	2.8	2.6	2.2	10.1	8.6	8.0
035	皿	2	9.8	9.4	9.0	1.2	1.2	1.1	8.0	7.4	6.8
045	皿	37	10.6	9.1	8.1	1.4	1.2	0.9	8.2	(23)7.7	7.1
	坏	8	15.2	14.9	14.0	3.0	2.7	2.5	10.8	10.6	9.2
049	皿	28	9.0	8.2	7.6	1.9	1.4	1.0	6.6	(25)6.0	5.3
	坏	42	17.6	12.8	12.0	3.6	2.7	2.2	9.0	(34)8.1	7.5
054	皿	4	8.6	8.3	7.5	1.6	1.3	1.0			
	坏	2	13.4	12.9	12.4	2.8	2.7	2.6			
058	皿	73	10.2	9.2	8.2	1.5	1.3	0.8	8.2	(51)7.4	6.2
	坏	21	16.2	15.1	14.1	3.4	2.9	2.3	11.8	10.5	8.5
067	坏	2	11.9	11.9	11.8	2.6	2.4	2.2	8.7	8.5	8.3
084	皿	5	9.5	8.8	8.2	1.4	1.3	0.9			
	坏	2	15.2	15.2	15.1	2.6	2.4	2.1			
109	皿	2	8.9	8.9	8.8	1.3	1.2	1.1	6.8	6.8	6.7
110	皿	22	9.4	8.8	8.1	1.4	1.2	0.9	7.6	(8)6.5	5.8
187	皿	6	10.0	9.0	8.0	1.5	1.3	1.0	7.2	(2)6.5	5.8
229	皿	2	8.4	8.0	7.6	1.4	1.3	1.2	6.2	6.2	6.1
	坏	2	12.2	12.2	12.2	2.6	2.4	2.2			
233	皿	25	11.1	9.6	8.4	1.3	1.1	0.9	7.6	(9)6.8	6.0
	坏	2	15.4	15.4	15.4	3.5	3.4	3.2	10.5	9.8	9.0
236	皿	2	8.9	8.8	8.6	1.3	1.2	1.0			
239	皿	19	10.4	9.0	7.2	1.7	1.3	0.7	6.7	(7)6.1	5.6
	坏	6	14.8	(5)13.0	11.9	3.0	2.8	2.4	10.0	(3)9.0	8.2
240	皿	5	11.6	9.8	9.0	1.5	1.2	0.9	7.4	(2)7.1	6.7
241	皿	11	10.4	8.8	7.8	1.9	1.5	1.0	6.6	(4)6.5	6.2
	坏	12	16.0	12.5	10.6	3.0	2.7	2.4	8.6	(4)8.3	7.9
255	皿	4	9.6	8.9	7.9	1.2	1.1	1.0	5.6	5.6	5.6
266	皿	5	9.6	9.1	8.8	1.5	1.3	1.0	6.7	(2)6.7	6.6
	坏	4	16.6	15.7	15.2	3.2	2.9	2.5	11.6	10.8	10.0
310	皿	2	9.0	8.7	8.4	1.4	1.4	1.3	8.0	7.4	6.8
318	皿	6	9.3	9.1	8.8	1.4	1.2	1.0	7.0	6.7	5.8
	坏	3	15.0	14.4	14.0	2.7	2.6	2.5			
336	皿	60	11.7	9.6	8.2	1.6	1.2	0.8	8.9	(18)7.4	6.2
	坏	20	17.2	15.2	14.0	3.3	2.8	2.1	11.0	(6)10.5	9.8
342	皿	3	9.6	9.3	9.0	1.4	1.2	1.0	6.6	(2)6.5	6.3
347	皿	6	10.6	9.3	8.2	1.4	1.2	0.9	7.3	(3)6.9	6.0
354	皿	12	9.7	8.7	7.1	2.0	1.6	1.2	8.0	(4)6.1	5.0
	坏	2	14.6	13.3	12.0	2.9	2.6	2.3	11.3	9.9	8.5
389	皿	6	9.0	8.9	8.4	1.2	1.2	1.1	7.2	(2)7.1	6.9
	坏	4	17.2	16.0	14.7	2.9	2.6	2.3			
390	皿	19	10.6	9.6	8.6	1.5	1.3	0.9	7.5	7.1	6.1
403	坏	3	13.1	12.9	12.7	3.0	2.7	2.2	9.1	9.0	8.8
404	皿	11	10.0	9.1	6.8	1.9	1.3	1.0	7.7	(3)7.6	5.8
406	皿	3	12.4	9.9	8.6	1.3	1.2	1.0			
408	皿	9	10.6	9.3	7.8	1.5	1.3	0.6			
	坏	4	16.8	15.6	14.0	3.1	2.7	2.0			
409	皿	4	10.6	10.0	9.6	1.5	1.4	1.3	7.5	(2)7.5	7.5
	坏	5	17.4	14.0	11.6	2.9	2.8	2.5			
411	皿	22	10.2	9.2	7.2	1.7	1.2	0.9	7.3	7.2	7.0
412	皿	4	11.0	9.4	7.6	1.2	1.1	0.8			
413	皿	5	9.4	8.8	7.8	1.5	1.4	1.3			
	坏	4	17.2	13.3	10.4	3.3	2.9	2.7			
415	皿	10	10.0	9.3	7.8	1.4	1.2	1.0	7.3	(5)6.8	6.0
		6	17.2	15.3	12.4	3.1	2.7	2.2			

Tab, 1　出土土師器遺構別計測表＜平均値＞

図　　版

作業風景

(1)箱崎遺跡群第５次調査地点遠景（南から）

(2)第５次調査地点完掘状況（東から）

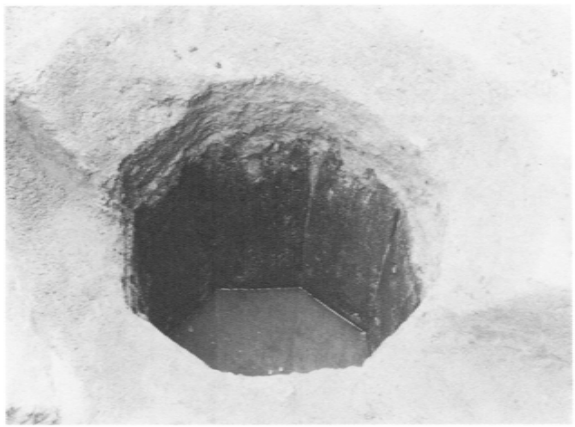
(1)柱穴・掘立柱建物検出状況（東から）

(2)調査区中央～東側井戸分布状況（北東から）

SE005

SE049

SE049



SE052

SE084

SE236

遺構個別写真（SE005、049、052、084、236）

SE240

SE241

SE310

SE354

SE388

SX008

遺構個別写真（SE240、241、310、354、388、SX008）

SK017

SX025

SX027

SX045

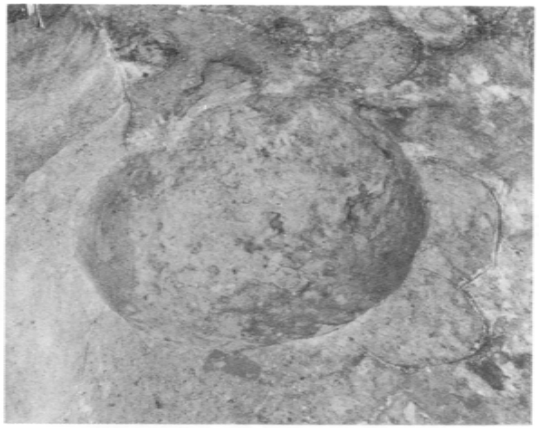
SX058

SX058

遺構個別写真（SK017、SX025、045、058）

SK067

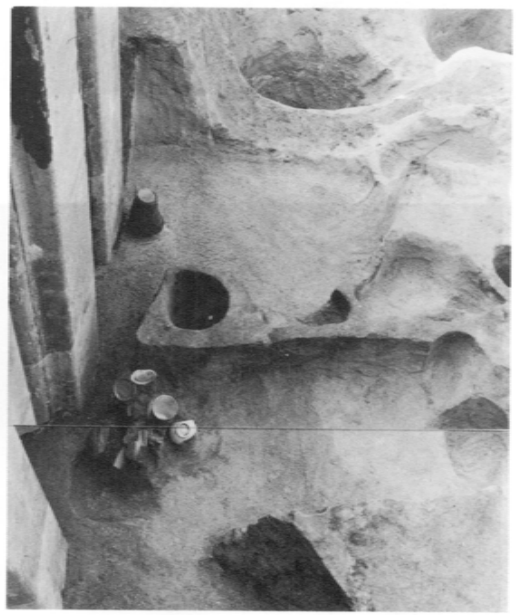
SK067



SX229

SK266

SX347



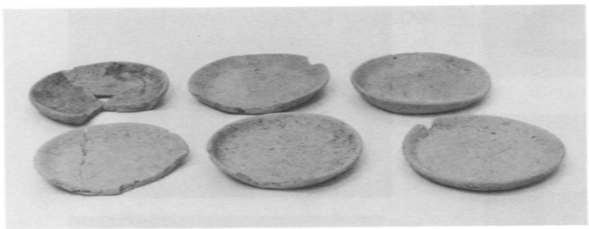
上　SK335
下　SK390

遺構個別写真（SK067、SX229、SK266、SX347、SX335、SK390）

(2)、(3)
10(4)、11(5)

6(23)、7(24)、(25)
(26)、(27)

13(45)、15(43)、12(44)

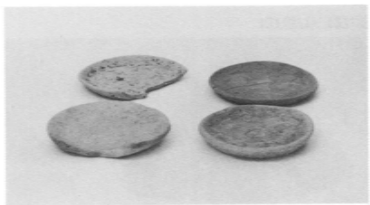


(47)、(50)、(51)
(52)、(53)、(59)

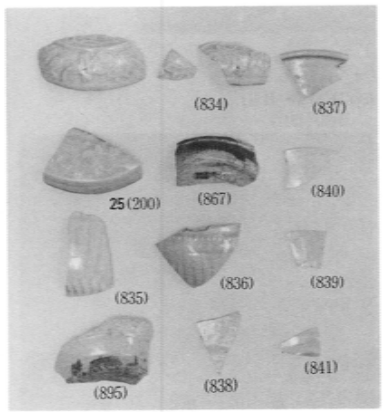
104(173)

96(165)、(163)、97(166)、95(164)

(188)、(189)、(190)
(192)、(196)



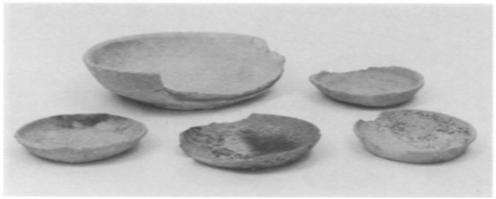
86(126)、87(127)
88(128)、89(129)



18(183)、17(181)、(185)、(180)
(187)、16(179)、(182)
(186)、(184)

(54)、(55)、(51)
(96)、(100)

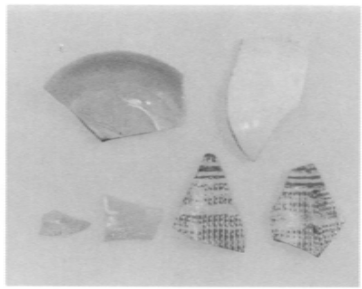
(ゴチック体は実測番号、明朝体は登録番号)



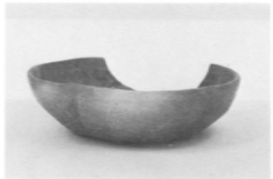
(258)、**57**(283)、(262)、(290)、(274)

74(351)、**75**(352)、
(316)、**33**(327)

(893)



(176)、(894)
(177)、(954)、(1336)

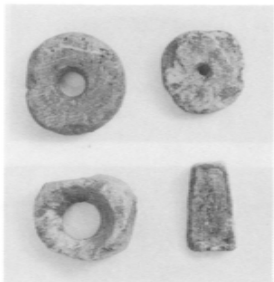


112(209)

137(371)、**127**(393)

(390)

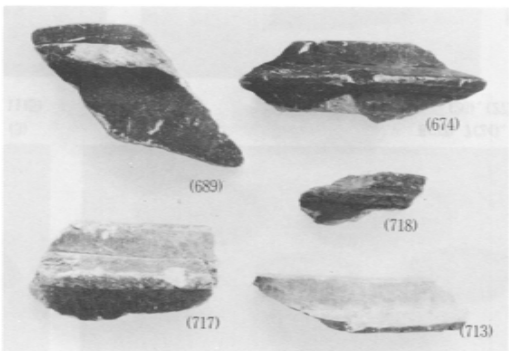
(451)、(452)、(453)



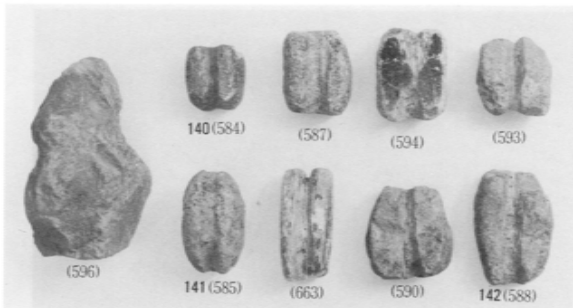
144(591)、(595)
143(589)、**145**(592)

139(597)

(388)



(222)、(262)、**48**(235)



(ゴチック体は実測番号、明朝体は登録番号)

筥崎宮・箱崎遺跡関係年表

延喜21年（ 921）	6月21日に八幡神の託宣。
延長元年（ 923）	穂波郡大分宮から遷座（筥崎宮史料・天満宮史料３）。
永承６年（1051）	石清水八幡別当が筥崎宮検校に補任（岩清水文書5・大日古）
保延６年（1140）	５月５日に筥崎宮・香椎宮・大山寺の大衆・神人らが大宰府以下屋舎数十家屋を焼き払事件が発生（百練抄保延6年6月20日条）。
仁平元年（1151）	大宰府による箱崎・博多の大追捕が行われた。
文永11年（1274）	元寇にて宮焼失。元寇で博多から箱崎一帯が戦場となる。神体は宇美宮へ避難したが入れず上山極楽寺へ移る（八幡愚童記／思想大系）。
弘安３年（1280）	筥崎宮消失。
弘安10年（1287）	筑前国御家人中村続に多々良川河口に長さ一丈の乱杭を打つ旨の命令（元寇防塁編年史料）。
康正２年（1456）	大内氏が、周辺の住民が門松や祇園会作物のため箱崎松原の松を伐採する事を禁じた。
文明10年（1478）	筑前守護大内政弘が、博多・箱崎に対して各銭1000貫を賦課した。
文明12年（1480）	連歌師宗祇が、博多から山口への帰途箱崎松原を通り箱崎へいたる。箱崎勝楽寺へ宿泊後、香椎宮へ（筑紫道記）。
天文15年（1546）	大内義隆により本殿・拝殿の再建。
永禄12年（1569）	大友氏拠点立花城、毛利氏によって落城す。
天正15年（1587）	豊臣秀吉は薩摩からの帰陣のおり、筥崎宮に滞在し千利休や津田宗及・細川幽斎らと茶会、連句会を行う（宗堪日記、豊前覚書）。
天正19年（1591）	小早川隆景に命じ朝鮮出兵に備えて箱崎松原に兵糧倉30棟を作った。（豊前覚書）また、そこを倉本と称したという（続風土記拾遺）。

参考文献

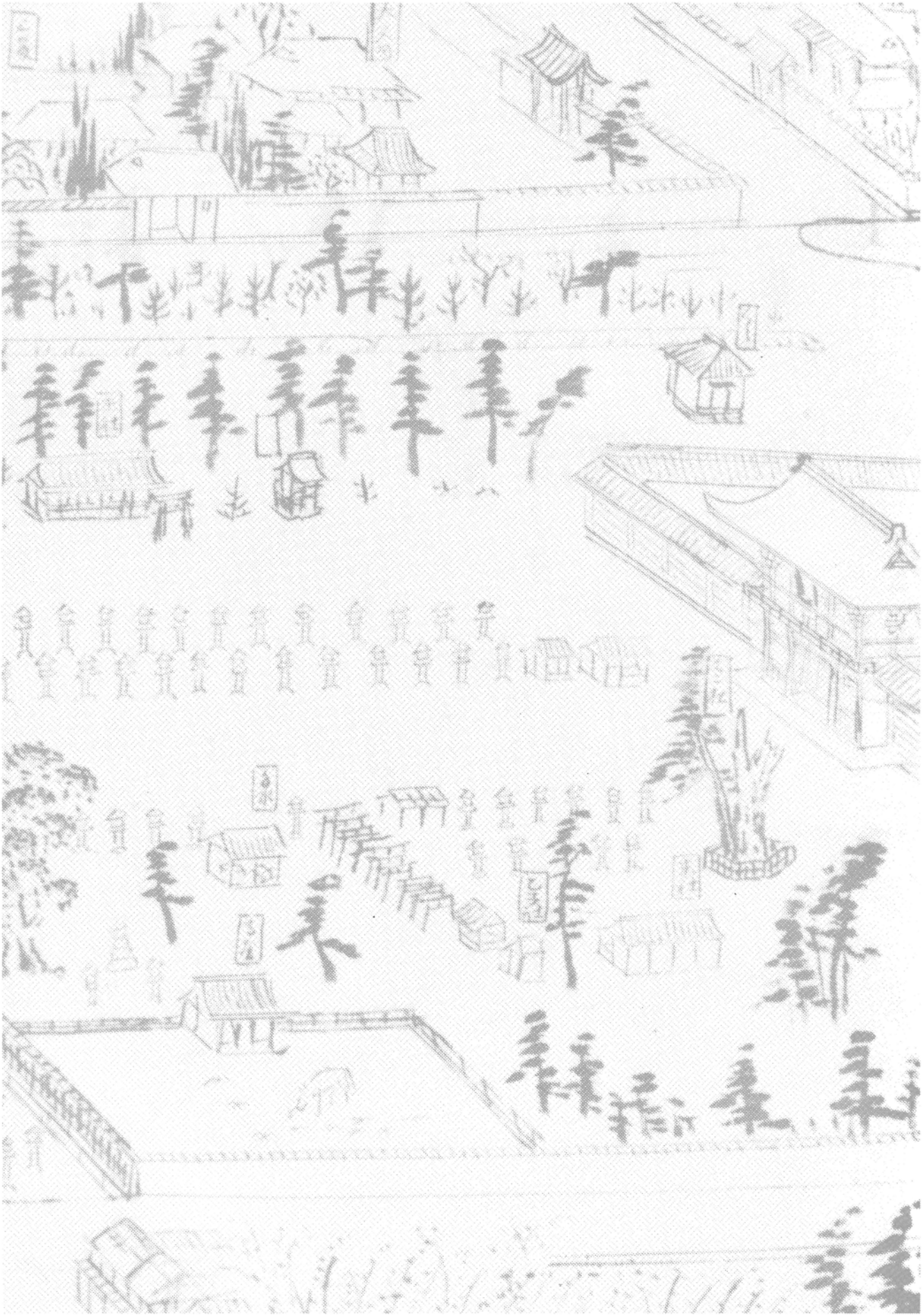
福岡市教育委員会　1988
『Ⅲ．高速鉄道関係調査 箱崎・馬出遺跡群』
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ
福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集

福岡県教育委員会　1987
箱崎遺跡 ―東区箱崎１丁目所在遺跡の調査―
福岡県文化財調査報告書第79集

福岡市教育委員会　1991
箱崎遺跡２ ―箱崎遺跡群第３次調査の報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第262集

福岡市教育委員会　1991
8967　箱崎遺跡第３次（HKZ-3）
福岡市埋蔵文化財年報Vol. 4

福岡市教育委員会　1991
8975　箱崎遺跡第４次（HKZ-4）
福岡市埋蔵文化財年報Vol. 4

箱崎３
―箱崎遺跡群第５次調査の報告―

平成4年（1992）１月13日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷　寿印刷株式会社